
俺と彼女の騒乱日記

神無月 夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の騒乱日記

【Nコード】

N5799S

【作者名】

神無月 夜空

【あらすじ】

この話はちよつとひねくれて毒舌な俺と俺の彼女が巻き起こすハートフルラブコメディー（一部誇張有り）と見せかけたバイオレンスでラジカルな日々かもしれないよくわからない日常を綴った物語である。多分……。

0 プログログという名の独白（前書き）

初投稿ですので、至らぬ点が数多くあると思いますが、生暖かい目で見守ってください。感想や駄目な箇所など逐一報告していただけると幸いです。

0 プロローグという名の独白

この文章は俺が体験した忘れがたい出来事を書いたものである。故に俺の一人称の語りとなっている。実際問題、一人称というのは如何なものだろう。すべてが主観ということになるから、実際の出来事との齟齬も大きいと思う。けれど、人間の記憶などは最初から主観であり、自分の都合も悪いことや、些末な事柄は忘却してしまうのが常である。結局自分に都合がよくなるものではないかと愚考する限りではある。まあ、「思い出フィルター」などといったものも存在するしな。

こんなしょうもないことばかり考えていても時間の無駄ではあるのでそろそろ本題に入ろうと思う。

さて、（「さて」というと、大体は推理小説の探偵が謎解きを始めるにあたって頻繁に使われる言葉ではある。まあ、ここでは一切関係がないが。）高校生当時、いくらひねたガキであった俺にしてもやはり青臭い青春だなんていう恥ずかしいものの存在を信じていたわけであるからして、そういった過去が存在した。正直、このようなものを語るという行為にさえ寒く感じるというのに、高校時代俺の生活を滅茶苦茶にしてくれやがった彼女のことはずすわけにはいかないのが現状だ。

それでは、遺憾ながら俺の高校時代の足跡を語らせてもらおうと思う。

0 ーブ 로그 という名の独白 (後書き)

更新は不定期で遅い可能性が高いので、気長に待っていてください。

1 一入学式は退屈で眠いものだ

4月7日

俺は何故かは知らんが、高校の入学式である今日、とても早い時間に見目が覚めた。どうやら自分でも気が付かなかったが、少々気分が高揚しているようだ。

今日は一応中学の時の友人達と待ち合わせをしているのだが、学校の校門であるので、さっさと学校に行ってしまうという至極珍^{なかにん}しい考えが浮かんだ。おそらく中学時の友人達の一人である中谷祐^{うし}司は嵐が来るなどといったことをいうだろう。それ程に珍しいことであつた。

俺がテケテケと学校まで歩いていくと、校門の近くに植えられている桜の木の下に立っている女生徒を見かけた。俺は何となく近づいてその娘の近くに立って木をボヘーと見ていたところ、彼女は突然振り向いてきた。

「ちょっと、あんた何？」

と言いながら、彼女は睨みつけてきた。

だが、俺はそんなことよりも彼女の美少女っぷりに驚いた。俺は基本的に何かを褒めるということはない性質ではある。しかし、彼女の大きな目、すっと通った鼻、桜色の唇、真っ黒なストレートの長い髪、モデルのような体形、どれをとっても一流以上であつた。俺は恥ずかしながら見とれてしまった。けれど、俺の口は思考とは別に動いていた。

「俺が何者であるかなど些細な問題だ。この学校の制服を着用している以上この生徒であることに間違いはないのだからな。」

「そういうことを聞いてんじゃない……きよわ！」

彼女は、俺が彼女の髪についたゴミをとってやると奇声をあげた。

「いきなり何すんのよ。」

「いや、君の髪にゴミがついていてな。とってやっただけだ。大

したこともあるまい。それよりも何時までも俺を睨んでいても仕方ないだろう。笑ったほうが似合うぞ。」

俺はにやっと笑ってそう言った。

「なんか口ぶりが偉そうね。」

などと彼女は顔を赤らめながら言ってきた。

「あんた名前は？」

「人に名を尋ねるときは自分から名乗るべきだと思わないか？」

「わかったわ。私は片桐沙紀^{かたぎりさき}。」

「そうだな。俺のことはハルとでも呼べ。」

「何であだ名なの？」

「俺の知り合いは一人残らずそうよぶからな。」

「じゃあまた会いましょう。」

彼女はそう言って立ち去っていった。

腕時計を確認するところそろそろ待ち合わせの時間だった。予想以上に時間が過ぎていたらしい。

「しっかしハルがこんな早くから学校に来るなんて天変地異の前触れか？」

中学時代の友人佐藤颯^{さとうはやて}は開口一番そんなことを言ってきた。まったく失礼な奴だな、と思っている内に、2人目の西園寺大貴^{さいおんじだいき}が到着した。

「何だ。今日は祐司の奴がビリかよ。」

「珍しいこともあったもんだ。」

と祐司がこっちに向かいながら呟いていた。

いつものメンバーがそろったところで、俺達はどのクラスに所属しているか確認しに行った。

「お、俺達全員6組みたいだな。」

祐司がそう言ったとき、俺は見覚え（正しくは聞き覚えだろう）のある名前が同じクラスにあるのを見て、少々憂鬱な気持ちになった。

4人でクラスまで行ったところ、都合よく4人で固まれるだけの席が空いていた。

「おい、すっげー美少女がいるぞ。」

そういうのに興味津々といった口調で颯は言う。

「まあ確かに。だが、美少女っていう言葉は何かいただけないな。どことは言えないのだがどこか気に食わん。」

謎なことを祐司は言い始めた。

「確かに美少女の使い方としては問題ないのだろうが、美少女という響きが気に入らないというのは同感だな。」

俺がそういったところで、担任っぽい人物が教室に入ってきた。

「はい。整列して体育館まで行ってください。」

担任？はそう言いながら教室を出ていきやがった。

「何だあいつ。」

「仕事ぐらいはしてほしいものだな。」

颯の言葉に受けるような形で大貴は呟いた。

入学式はかったるかったので、寝ていたからよくは覚えていない。

式は無事終了し、俺は祐司に起こされ、教室まで無事に帰還した。

そこで、俺が口を開こうとしたところ、担任？が教室にやってきた。

「えー。私は1年間君達の担任をすることになった橘健吾^{たちばなけんご}だ。よろしく頼む。」

と奴はおざなりな自己紹介を終えた。

この教師大分適当だな。仕事する気があるのだろうか。というかこんな教師が増えてきたから日本の教育は駄目になってきたのでは

ないだろうか。そうに違いない。と俺が思考に没頭していると、どうやら自己紹介が始まったらしく俺の番になったが、いかにもナンプレートなセリフによって事なきを得た。

その後、しばらくボーとしていた。人間にはやはりボケつとする時間は必要だと思う。煩わしい人間関係や社会のしがらみにとらわれず、一人で思考に耽るのは良いものだ。

ここまで考えていると、何やら教室が騒がしくなった。どうやら件の美少女が自己紹介する頃合いのようだ。だがまあ、俺の人生には朝の出来事以上に関わることはないだろうと思っていた。後になって、この考えが間違っていることがわかるのだが、この当時はそう思っていた。

自己紹介も終わり、担任が必要な連絡をし、解散となった。俺達4人はかたまり、雑談を始めた。

「颯、お前あの片桐とやらをずいぶんと熱心な目で見つめていたじゃないか。」

「うるせえ。大貴だって気になったんじゃないのか。」

「いや、お前のように下心満載な視線ではない。素直に感心してただけだ。」

「だがハルは全然気にしていなかったな。」

「当たり前だぜ、祐司。どうせ俺の人生に関わることなどないだろうからな。」

「なかなか誰しもお前のようにはいかないと思うぞ。何せあの容姿だ。」

「そうだそうだ。男ならつい見てしまうのが本能ってもんだ。」

「」「颯は黙ってる。」「」

「すいませんでした。」

「ちよつといいかしら。」

突然、鈴の鳴るような声が聞こえたので全員で振り向くと、話題の中心人物が立っていた。

「ハルさん。今すぐ私と一緒に来てくれませんか。」

「特に問題はないが。」

「よかった。では来てくれますね。」

俺は何故か彼女に呼び出されてついていくこととなった。

「ハル。何故お前が。」

颯が呪詛のような言葉を漏らしていたが無視した。他の奴らはあまりのことに驚いて思考がつかないらしく、口をあんぐり開けたままだ。こう考えると、実は颯がすごい奴のように思えて少々不愉快な気持ちになった。

1 入学式は退屈で眠いものだ（後書き）

初めてだとなかなか上手く書きたいように書けません。かなり大変です。ですが、思っているより更新のペースははやくできそうです。

2 一非常事態宣言発動

俺は彼女の後をついていった。すると、彼女は校舎裏で立ち止まり、振り返ってきた。

「ここなら大丈夫そうね。」

「一体全体何なんだ？俺と君は今朝出会ったくらいの接点しかないはずだろう。」

「話したいことがあったから。」

こんなところに連れてくるということは他の人間にあまり聞かれたくないことなのだろう。俺は少々警戒せざるを得なかった。普通の奴ならば、告白などといったイベントを考えるだろう。しかし、俺と彼女は今朝あったばかりである。怪しさ爆発といった感じだ。脅迫なども考えられる。俺は十分に警戒しながら尋ねた。

「一体、何のようだ？」

彼女は突然顔を赤くしてブツブツと何やら呟き始めた。怪しい呪文でも唱えているのだろうか。呪いをかけられそうだ。

突如、彼女はガバツと顔を上げ、驚くべきことをのたまった。

「好きです。付き合ってください。」

「まあ待て。俺と君は今朝会ったばかりだ。誰かと勘違いしているのではないのか？」

俺は突然のことに頭が混乱した。コイツは一体何を言っているんだ？どこの世界にちよつと前に会ったことのある男に告白する女がいる？いや、存在するわけがない。そういうのは小説やゲームの世界だけだ。おそらくこれは、美人局の一種だろう。油断するものかと、俺は決意した。

「冗談はやめてくれないか。心臓に悪い。」

「冗談じゃないんだけど。」

「いやいや、そこら辺に君の協力者が隠れていて、俺が本気になったところを嘲笑うつもりだろ。」

「そんなことないっ！本気。だから今日は一緒に帰ってくれない？」

「何故そうなるのか良く分からないが。まあ、共に帰るぐらいならいいが。」

「よかった。」

彼女は安堵したかの様にため息をついていた。

「なら、今すぐ帰るか。」

「そうね。」

何故か彼女の声は弾んでいるように聞こえた。気のせいかもしれないが。

そんな訳で俺達は一緒に帰ることとなった。

下校途中、彼女は色々と話しかけてきた。

「結局、返事はしてくれるの？」

「正直信じられなくてな。急に今日会ったばかりの奴にそういったことを言われても悪戯だとは思えない。」

「いつも、そんな感じの口調と考え方なの？」

「仕方ない。昔からだ。」

「そう。でも、さっきのは本気だから、返事がほしいな。」

「いいぞ。」

「別にいい返事を期待してるわけじゃないんだけど。ってホントに？適当じゃなくて？」

「構わない。ただし、俺は……いや俺達は互いのことをよく知らないわけだ。実際のところ幻滅すると思うぞ。それでいいなら構わないが。」

「それでいいよ。ついでにハルの家にいったいい？」

「またも彼女はわけのわからんことを言い始めた。俺の家には今妹し

かないはずだ。そんな状況下でできたばかりの彼女？を連れて行くのは非常にマズい。確実に妹が冷やかしてきてウザい。

俺が考え込んでいると、否定のポーズに見えたのか彼女の目が心なしかウルウルしている様に見える。女の子を泣かせるのは俺としても本意ではない。仕方ないので了承した。すると、彼女は目に見えて機嫌が良くなった。

「一つ注意しておく、今家には妹しかない。自分独自の世界観を持つようになる中二のだ。あまり相手にしないでくれるとありがたい。」

「わかったわ。」

彼女は聞いているのだから聞いてないのかよくわからない感じで返事をしてきた。いや、多分聞いてないな、これは。

そんなこんなで我が家についた。いたって普通の民家である。特筆するようなことはない。ないったらない。(しつこく繰り返す。大事なことなので。)

「ただいま。」

「お邪魔します。」

彼女は控えめに小さな声でそう言った。

「おかえりーりーりー。」

妹は馬鹿丸出しの返事を返してきた。トテテっと玄関まで走ってくると、口を大きく開けて叫びやがった。

「兄ちゃんが女の子連れてきたー！！ありえない。これは幻覚かっ！！しかもものすごい美人だしっ！！」

相変わらず妹は馬鹿であった。

俺は嘆息して、彼女に馬鹿を紹介した。

「こいつは俺の妹の優奈だ。だが、気にせずバカと呼んでくれて

も構わない。」

「いくら妹とはいえ馬鹿はひどいんじゃない？」

「事実を述べただけだ。この馬鹿な小娘は無視するに限る。」

「兄ちゃん、いい加減彼女さんを紹介してくれない？」

俺が口を開こうとしたところ、彼女はそれを制止して、自己紹介を始めた。

「私は片桐沙紀よ。名前を呼んでくれて構わないわ。それにあなたもよ、ハル。あなたにも名前で呼んで欲しい。」

「わかった。とりあえず、何時までも玄関にいるわけにもいかなしいし、居間にでも行こうぜ。」

俺達は居間へと移動した。

「お茶でも入れてくるから。」

俺はそう言って居間をあとにした。茶を入れながら、考えることは彼女のことに他ならない。普通の人間が、一目惚れなどがあるにしても会ったその日に好きになった相手の家に来るなど常識的に考えて有り得ないことだ。何を狙っている？家には特に金目のものもないし、俺自身もそんなに価値があるわけではない。

とりあえず、お湯が沸いたようなので茶を入れていると、居間から話し声が聞こえてきた。不自然なことではないが、妙に盛り上がっている。俺は彼女と妹の分の湯飲みを持って行った。

そこでは、彼女と妹が異常に盛り上がったテンションで話していた。俺は話に入らず、手持無沙汰で座った。内容はどうやら俺のことに關してらしい。妹が俺の隠された過去を暴露しようとしたところで、奴の口を塞いだ。

「お前、余計な話ばかりするな。」

「えー。でも沙紀さんが聞きたがってるしい。いいじゃん別に。減るものじゃないし。」

「俺のプライドとかが減るからダメだ。」

全く油断も隙もあったもんじゃない。危険すぎるバカをどうしようか。

俺が真剣にバカの処刑方法を考えていると、

「夕食ウチで食べて行つてよ。」

と奴は彼女を夕食に誘った。

「じゃあ、お言葉に甘えて。ご相伴させてもらいます。」

マズイな。非常にマズイ。外堀を埋められている。それに、そろそろ母さんが帰宅する。このままだと、家族公認の上に冷やかされる。そんなことは俺の矜持にかけても許されるものではない。いい加減ご帰宅願おう。

すると、ガチャという音とともにただいまという今の俺には死刑宣告にしか聞こえない声が聞こえてきた。

「この美人さんは誰かしら。」

「兄ちゃんの彼女さんだつて。」

「ウチのハルごときにこんな綺麗な彼女ができるなんて世も末ねえ。」

「お母さん、沙紀さんに夕飯食べて行ってもらおうよ。」

「いい案ね。いろいろ聞きたいこともあるし。」

母さんが恐ろしいことを言う。背筋が寒くなった。まだ春だし。

「片桐沙紀です。不束者ですが、よろしく願います。」

あいさつの仕方が違う！やめてくれ。俺はまだ心の準備ができてない。あいさつは魔法ではないが、重要なものなんだ。

「本当によくできた娘ね。うちのハルにはもったいないわ。」

それから、母さんは夕飯の準備を始め、彼女と妹は話始め、俺は一人孤独に夕飯まで待っていないではならなくなった。これが社会の不条理なのかと俺は自分の運命を受け入れるしかなかった。

夕飯時も俺そっちのけで3人で話に花をさかせ、孤独を耐え忍ぶしかなかった。

夕飯も食べ終わり、俺は椅子から腰を浮かせ、

「家まで送ってやるよ。」

と彼女に提案してみた。

「よろしく頼むわ。」

彼女はそう言って、微笑んできた。少し俺が見惚れるくらい可愛かった。

俺達が家を出ると、夜空に月が輝いていた。

「何で、今朝会ったばかりの俺に告白してきたんだ？」

彼女は顔を赤くしながら答えた。

「髪についてたゴミをとってくれた時のあなたの悪戯っ子みたいな笑顔にひかれたのよ。」

「よくわからんが。まあいい。本気ってことでいいのか？」

「ええ。明日から迎えに来るから。」

「俺は明日学校で嫉妬に狂った男どもに狙われるのか。面倒だな。それと、お前「沙紀って名前と呼んで」わかった。沙紀は猫被ってるだろ。」

「そうね。人前では被るわ。」

「じゃあ何で俺と初めて会ったときは被ってなかったんだ？」

「不審者だと思ってたから。でも予想以上に面白いひとだった。

それに、やっぱり素の自分が出せるっていうのは猫被りにとって重要ね。」

「そうかい。」

俺達はその後無言で歩き続けた。何故だかその沈黙は心地よかった。

とあるマンションの前で彼女は立ち止まると、

「ここが私の家。今日はどうもありがと。」

と言って、マンションに入ってしまった。

「じゃあな。」

俺は返事をして家に帰るのだった。

俺は帰る途中に明日からの身の振り方を考えなくてはならなくな
ったのはここだけの話だ。

2 一 非常事態宣言発動（後書き）

とりあえず初日だけ連続投稿です。

3 一朝起きるのは辛い

「いい加減起きなさい。」

俺は夢見心地で微睡んでいたところ、誰かが起こしに来たらしい。

「あと3日。」

「そんなに寝かせてあげるわけじゃない。今すぐ起きないと言葉では言い尽くせない世にも恐ろしい出来事が待っているわ。」

俺はいつもと違う声に対して不審に思い目を開けた。目の前には彼女の顔があった。

「もうちょっと目を閉じててくれればキスできたのに。」

彼女は不満げに言う。

俺は目の前の状況が良く理解できなかった。何故俺の部屋に彼女がいるのか、何故彼女が俺を起こしに来ているのか。

「何故ここにいる？」

「起こしに来てあげたのにそれはないでしょ。」

どうやら彼女は昨日の宣言通り、俺を迎えに来たらしい。ついでに俺を起こしに来たらしい。

状況は理解できたが、俺は今にも叫びたくなった。何で俺の家に普通に上り込んでいるのか。こういうのは幼馴染の仕事だろ。彼女は家の前でしおらしく待っているのが典型的なパターンだろうが。俺は寝起きで頭がよく働かず、そんな益体もないことを考えていた。

「全く、いつになったら自分で起きられるようになるのかしら。」
朝食の席で母さんはため息をつきながら言う。

それはきつと永遠に来ないだろう。低血圧と朝弱いことに科学的根拠はないらしいが、俺は低血圧だし、朝も弱い。休日など油断すれば、昼過ぎまでずっと寝ている。

そんなようなことを母親にいつも通り力説しようと思ったところ、いつもより朝食の席に約一名多いことに気付いた。

「何で一緒に朝食食べてんだ？」

「朝食に誘われたからに決まっているでしょう。」

彼女はしれっと答えやがった。

「家で食べてこなかったのか？」

「朝食はいつもあまり食べないのだけど、誘われたからね。」

「無理して食べる必要ないぜ。というか、何故こんな早くから家に来る必要がある？ 迎えに来るんだったらもっと遅い時間でもいいだろ。」

「少しでもはやく会いたかったから。」

彼女は顔を赤らめて言ってきた。

母さんとかバカの優奈とかが無責任に冷やかしてくる。どうすればいいんだ？ ググれば答えとか書いてるのか？ これが四面楚歌つてやつか。

8時頃家を出た。

「言っておくが、学校ではできる限り接触を控えたいのだが。」

「え？ できる限り学校で一緒に過ごしたい？ そう言ったの？ わかってるわ。」

「耳腐ってるんじゃないのか？ あまり近づきたくないって言ったんだよ。お前みたいな人種となると、いらん嫉妬も買うし、暗い夜道も気をつけなきゃなくなるからな。」

ここまで言うと、彼女は何故か頬を膨らませながら言った。

「名前と呼んでって言ったのに。」

「わかったわかった。そこは気を付ける。だが正直あまり詮索されたくないしな。不必要な会話をしないってことで手を打ってくれるとありがたいんだが。」

「やだ。」

「は？どういうことだ？」

「折角恋人っていう立場に立ったんだし、そんなことはしたくないの。」

俺はため息をつきたくなる気持ちを堪えて言った。

「でもな、俺みたいな見た目が普通の奴と沙紀みたいなその…なんというか…綺麗な娘と一緒にいるのは基本的に男が不必要な嫉妬を買うと相場は決まってるんだ。そして俺はそんなものを買いたくない。つまり、沙紀と学校ではあまり接触しないのが望ましい。まあ、学校以外だったら良いが。」

何故か彼女の顔は真っ赤だったが、何か気に食わんらしく反論してきた。

「恋人同士だったら学校でも一緒にいるのが当たり前でしょ？私はそのんなの気にしないから。避けるんだったら、寧ろ積極的に話しかけるから。覚悟しておいて。」

そこまで言われると流石に俺も何とも言えん。思わずため息をつきながら、

「わかった。そこまで言うなら、断りきれん。俺も闇討ちに気をつけるようにするしか生き残る道はないか。」

と言う以外道は残されてはいなかった。

全く、某涼宮ハ○ヒに振り回される報われない男のように「やれやれ」と言いたくもなる。

学校に着くといつものメンバーに質問攻めにあうという予想された状況に陥った。質問してくるのは主に颯だったが。

「ハル、お前片桐には興味ないとか言ってたかったか？」

「ああ、言ったとも。それがどうかしたか？颯君」

「じゃあ何で今日一緒に登校してんだよ？」

「俺もそれには興味があるな。」

祐司が口を挟んできた。

「昨日呼び出されたことに関係があるのか？」

大貴まで質問してきた。

おかしいな。祐司や大貴はあまりこういうことに興味はないと思っ
っていたんだが。

「お前だってそうだろう？」

にやっとしながら祐司は言う。

祐司が心を読んできた。やはり、祐司は読みが鋭い。いつも4人
の中でリーダー的存在であっただけあるな。基本的に何でもできる
し。オールラウンドプレイヤーという感じだろう。

俺はおとなしく大貴の質問に答えることにした。勿論颯は基本ス
ルーで。

「ああ。昨日コクられた。」

「なるほど。」

相変わらず大貴は冷静だ。コイツはサッカーをやってる割には冷
静なんだよな。「スポーツ選手は冷静であるべきだ。」とか言っ
たし。というか、颯が文句言ってきた五月蠅い。

「それでハルはどう返事したんだ？」

「祐司、お前案外えげつないな。大体わかるくせに。」

「まあな。でも、本人の口から聞くのが一番だろう？」

「断る理由も特になかったしな。つまりそういうことだよ。」

「予想通りの回答だな。それよりもハルの今後のほうが心配だな。
今見るだけでも、男子のほとんどが敵視してきてるし、女子の半分
くらいが品定めするかのごとくこっちを見ているな。」

やはりそうか。あまり目立ちたくなかったのだが。仕方がないか。
これが諦めの境地ってやつか。

ザワザワしたHRが終わると、彼女とその友人らしき人物が近づいてきた。

「あなたがこの子のカレシさんですか。なるほどねえ〜。」

「誰だ？」

「おおっと。自己紹介が遅れましたな。私の名前はくらもとかな椋本加奈ですよ。君の名前は「ハルでいい」なるほどハル君ね。それより昨日はどうでしたかな？」

「お前の差し金だな。」

「あらら、バレちゃしょうがない。勿論全部ワタクシの作戦ですとも。昨日沙紀に可愛く相談されたからには計画を練ってあげるのが筋つものだからね。その顔を見る限り作戦は成功ということいいみだいだね。僥倖僥倖。」

聞きながら、自分の顔が苦虫を噛み潰したような表情になっていた。

この女一筋縄ではいかないな。こんなしゃべり方してる割にはかなり頭が回るみたいだ。気をつけねばなるまい。油断すれば、逃げられないところまで追いつめられる。

そんな思いとともに授業開始のチャイムが鳴るのであった。

3 一朝起きるのは辛い（後書き）

1週間に一度以上更新していければ、と思います。
感想・助言・誤字脱字の指摘等お願いします。

彼女の友人の名前を変更しました。気を付けてください。

4 一ゆするとねだるは同じ漢字（前書き）

彼女の友人の名前を変更しました。一応3話をチェックしといてください。

4 一ゆするとねだるは同じ漢字

昼休みとなった。ここからどうなるか見当もつかない。ちなみに休憩時間の度に颯が文句を言ってきたのは気にしない。適当に聞き流しておいた。

「さてと、昼飯でも食べるか。」

俺はそう言って立ち上がり昼食を食べに行くことにした。

ここで今までで最大の問題が発生した。

基本的に俺は弁当を持っては来ない。故に購買で何か買って食べるを得ない。しかし、現在の俺は何故だか弁当を食べている。決してコンビニ弁当ではない。れっきとした手作り弁当だ。誰が作ったのかという問いに対して答えは明白だ。勿論彼女に決まっている。そう。つまり、今俺は彼女と共に彼女の手作り弁当を食べている。正直周りの目が痛い。

「何か今朝から嫌な予感してたんだよな。」

「嫌な予感とはなにかしら？」

彼女は微笑みながら聞いてくる。

絶対わかっててやってるね、これは。実際のところ誰かさんに入れ知恵されたのだろうが。というか、周りの視線が痛すぎる。ヤのつく自由業さん達のメンチと同レベルかもしれない。原因は何なのかわかってはいるが、どうしようもないね。お手上げた。

「絶対やってくるとは思った。具体的にいつからかはわからんが、お約束だしな。でもまさか初日からとは思ってもよらなかった。負けたぜ。今朝からお約束をやるってことはこの状況も既に予想されていないといけなかった。」

「相変わらずね。つまり私の勝ちってことでいいのかしら。」

「何に対しての勝利だよ…。」

祐司が口を挟んできた。

「何だよ、聞いてたのかよ。」

「いや、聞こえてて当然だろうが。今俺達4人と片桐と椋本の2人でかたまつて昼飯食つてんだから。」

「まあ、そうだけど。でもさ、今まで祐司達と椋本で盛り上がったから、てっきり聞いてないと思ったんだよ。」

「あまりにわけのわからない会話だったんでな。思わずつつこみをいれてしまった。」

「わかるわ。ハルったらいつも変なことばかり言うの。」

「いつもって言うほどでもないだろ。」

俺はそう言ったが無視された。

「そうだな。しかしハルの真骨頂は毒舌と穿った物の見方だ。もう少ししたらわかる。まるで水を得た魚のように生き生きと相手を罵倒する様は見えてすすきりするぜ。」

「そこまで凄くはねーよ。」

全く不本意極まりない。俺は決して毒舌など吐かない。相手に事実を突きつけるまでだ。という旨のことを伝えたが、祐司は相手にしてくれなかった。

結局、昼休みはなんだかよくわからない会話と食事によって消費されたのだった。

何時の間にやら今日の授業が終わっていた。初日だしまともな授業ではないが、時間が進むのが早い気がしないでもない。

「『少年老い易く学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず』、か。」

「突然何?」

「妙に1日が短いような気がしてな。」

「老人みたいね。」

失礼だ。確かに俺は若者らしくないと自分でも思う。だが、決して老いているわけではない。断じて！

「ちょっといいかな。」

彼女は昨日に続き信じられない提案をしてきたのであった。

「今日私の家に来てくれないかな。っていうか来て。」

ここまでいくと本当に清々しい。ここまで俺の予想をこえるとはね。くつくつく。ここまで俺を虚仮にしたお馬鹿さんはいませんよ。

俺はあまりの混乱に怪しい電波を受信してしまったようだ。

「だが断る。」

「拒否権は認められないわ。」

人権を返せ。憲法にだって明記されているだろう、基本的人権が存在することを。公共の福祉に反しない限り守られるものだぞ。

「昨日あなたの家にお邪魔したのだから、今日は私の家に来てもらわないと。」

そうは問屋が卸さない。大体彼女の家に行くということはどれだけ自殺行為かよくわかる。それに父親がもしいたとすれば、その先の結果は誰でも予想できるものだ。というよりも俺が単純にいきたくないだけだったりする。なぜなら女子の家に行くとか、そんなのどうすればいいのかわからないからな。

「おい待て。手を引っ張るな。」

俺は懸命に彼女を説得しようと試みたが、敢え無く失敗し無理やり連れて行かれるのであった。男として何か物悲しいところがあったが、そこは目を瞑る方針で。

「ただいま。」

「お邪魔します。」

俺達は昨日と立場が逆転し、俺は昨日の彼女のように振る舞うの

であった。つまり、失礼のないくらいの声の小ささであいさつしたのであった。

けれども、何故か物音がしないのである。

「言ってなかったけど、私一人暮らしだから。」

最大の衝撃が俺を襲う。

「ちょっと待ってくれ。」

俺は気持ちを落ち着かせるために深呼吸した。

落ち着け。考えることは3つだ。何故彼女は俺を家に呼んだのか。

何故一人暮らしであることを言わなかったか。一体この状況は何だ？

「おい、何のつもりで俺をここに連れてきた？」

「そんなのわかりきってることでしょ。」

彼女は顔を真っ赤にして言ってきた。

やばいな。こんな感じだけど目が本気だ。^{マジ}

「悪いが、帰らせてもらう。」

「駄目よ。今日は帰さない。」

「それもっと違うシチュで体験したかったな。」

俺は遠い目をして言う他なかった。

「とりあえず人の邪魔が入らないところで話したかったのよ。さっきのは冗談。」

「笑えない冗談をありがとう。」

くそう。この程度の冗談も抜けなかったか。

居場所を所謂リビングに移して話を始めることにした。

「話のついでに夕食も家で食べてくれると嬉しいな。」

「なあ、知ってるか。強請る（ゆする）と強請る（ねだる）は同じ漢字なんだぜ。」

「それがどうかしたの？」

「別に。」

結局結構話し込んでしまつて、時計の長針が？を指している。夕食はかなりおいしかった。昼の弁当でわかつていたが、まさかここまでとはな。

「また明日ね。」

「そうだな。明日だな。今日は水曜だし。じゃあな。」

俺はそう言つて、家に帰るのだった。

彼女に聞いた話をまとめると、次のようになる。

彼女は現在実家を出て、マンションを借り暮らしているそうだ。実際お邪魔したわけだが。そして、この学校に通うのが目標だったらしい。どうやら彼女の両親と学校にある桜の木に関係があるらしい。そこはお茶を濁らされた感がある。そこで、俺と出会い、彼女曰く一目惚れをしたそうな。で、ここからが重要なんだが、これから毎日俺の家に来るなどと恐ろしいことを言っていた。なんだそりゃ。誰か助けてくれないか。俺は女子に縁がなくても平穩無事に過ごせば文句はないというのに。

このまま流されるしかないのだろうか。だが、女に勝てると思えない。運命を受け入れろということか。

俺は嘆息しながら眠りについた。

4一ゆするとねだるは同じ漢字（後書き）

なかなか話が進みません。次からはもうちょっと一話の分量を増やします。

次話は今回から少し時間が跳ぶ予定です。

5 一決闘って確か禁止されてたと思うんだけど（前書き）

頑張ってみたのですが自分の能力では一話の量を多くすることはできませんでした。

一話の量はこの先特に何かない限りこのままだと思ってください。

5 一決闘って確か禁止されてたと思うんだけど

相変わらず周囲の視線が痛い。だが、流石に一週間もこの視線に耐えていればある程度耐性もつく。

「手が止まってるけど、お弁当美味しくなかった？」

「いや、考え事をしていてな。弁当はいつもの通り美味しいな。だが、卵焼きは好きじゃないんだ。」

「あれ？目玉焼きじゃなかったっけ？」

「いや、卵焼きだ。俺は卵料理の中で卵焼きだけが嫌いなんだ。食べられないことはないが。」

「えーと。お弁当に入れちゃいけないのは確か…トマトと椎茸と葱だっけ？」

「ああ。その食材以外なら嫌いでも食べられないことはないからな。」

「好き嫌い多いんじゃない？」

「まあ、気にすんな。」

俺は昔から、食べ物が好き嫌いが激しい子供として有名だった。幼稚園児の頃なんか食えるものがほとんどなくて、この飽食の時代にも関わらず、栄養失調になりかけたこともあるくらいだ。

「そんな過去暴露してどうするの。けが自慢みたいなものよ。」

「君は弁当を作ってもらって、その上で好き嫌いまで主張するのか。まったく信じられないほど傲慢だな。」

突然割り込んだ声に反応して俺と彼女は声の方を向いた。

「お前誰だ？」

俺がそう尋ねると、割り込んできた謎の男（一応クラスメイトだと思ふ）は名乗りだした。

「僕の名前かい？なんだい、まだ覚えてないのかい？では改めまして、僕の名前は西村^{にしむらかずと}一斗。片桐さんを君の魔の手から救う者さ。さあ、僕のところへ。」

「何言ってんだ、お前。頭に蛆でもわいたか？」

「どうしてあなたのところに行かなければならないの？」

「そうか。片桐さんは照れているんだね。」

俺の発言を華麗にスルーし、彼女の話をも曲解しやがった。

ふむ。このタイプは面倒だ。今の内に潰しておかないと後々厄介なことになるのは目に見えている。問題は、自分の都合のいいように物事を解釈する人間を一体どんな手段で潰すかだな。何かにおいて、徹底的に奴の鼻っ柱を折ってやらねばならん。だが、こういうタイプはあまり力では屈しないからな。妥当に心でも折っとけばいいか。

「悪戯を思いついたような顔してるわよ。」

言われて気づいたが、どうやら俺は知らず知らずのうちに笑みを浮かべていたらしい。

「片桐さんを君の手から救うために君に決闘を申し込む！」

何言ってんだ、コイツ。いや、逆に考えるとこれはチャンスかもしれない。観客を大量に集め、そこで何か観衆に対するパフォーマンスをし、奴のプライドをズタズタにしてやればいい。

「ちよつと待ってよ。それは「いいぜ。受けてやる。」っていいの？」

「そうか。では、放課後にグラウンドで待っているぞ。」

奴はそう言って立ち去って行った。

「ホントにいいの？」

「まあな。俺は喧嘩に慣れてるし、別に勝たなくても観客に対してのアピールを上手くやれば、奴のプライドを粉々にしてやれる。ああいうタイプはできる限り迅速に対処しなくちゃならないからな。」

「そうだな。だけど、ハルは喧嘩は強いが奴も決闘だなんて言うてきたからには勝算があるだろう。おそらく何かの格闘技とか身に着けてるんじゃないか？くれぐれも油断するなよ。」

いつの間にか祐司が近づいてきてアドバイスをしてきた。

「いつの間に!？」

「ひどいな。西村とやらが去って行った時からいたぞ。」

「だが、アドバイスは受けておく。」

「気をつけろよ。」

祐司はそう言い残し、自分の席に戻って行った。

「本当に大丈夫なの？」

彼女が不安そうに聞いてくる。

「大丈夫だ。こういうのは慣れてるから。大体対処法もわかってる。」

「慣れてるって女の子を取り合うこと？」

「違うから。笑えん冗談はよせ。」

彼女が笑いながらからかってくる。

「そろそろ昼休みも終わりだろ。戻るか。」

俺は午後の授業中ずっと作戦を考えていたので授業にはほとんど身が入らなかった。ミトコンドリアとかゴルジ体とかどうでもいい。

そして遂に待ちに待った決闘の時がやってきた。

グラウンドで向かい合う俺と奴。

その周りを取り囲む観客。

俺と奴の間に立つ祐司。いつの間にか祐司が審判になったらしい。

「僕が勝ったら片桐さんから手を引け。」

「手を引くってのが良く分からないが…。まあいい。なら俺が勝ったらお前はもう俺達に干渉しないってことでいいか？」

「それでいいとも。」

「じゃあ、祐司ルール説明をよろしく。」

「わかった。ルールとしては、金的・目潰し・噛みつき・引っ掻きがなしでそれ以外は何でも有りだ。また、決着はどちらかの戦意喪失・気絶・戦闘の続行が不可能と判断した場合につくものとする。それでは開始っ！」

俺と奴の決闘が始まった。



「予想外の展開だったな。」

祐司は驚いたように言う。

俺も予想外の展開に何とも言えなかった。

「ハルが負けるとも思わなかったが、西村にも勝算があると思っただんだが……。」

大貴までこの始末だ。

「あいつ弱すぎだろ。」

哀れな西村。颯にまで馬鹿にされるとは。

「俺にまでってどういうことだよ。」

「そんなことは置いといても、あいつは一体何がしたかったんだか……。」

祐司も何とも言えない表情をしていた。

なぜなら、西村はとてつもなく弱かったからであった。喧嘩を吹っ掛けてくるぐらいだし何か格闘技でも齧っているのかと思いきや、あまりにも弱すぎ一発殴っただけで尻尾をまいて逃げ出したのであった。

何か颯がギャーギャー騒いでいるが無視した。

そんなこんなで帰り道。俺と彼女は一緒に歩いていた。

「決闘なんて言うから驚いたけど、終わって見たら呆れてものも言えないわ。」

「あれは決闘そのものが悪いんじゃないってアイツが駄目すぎたのが問題だ。あの弱さでよくもまあ決闘だなんて言えたもんだよな。」

「でもこれで解決ね。」

「まあな。アイツもこれに懲りて黙るだろ。それに観客を大量に集めたからな。証人もいっぱいいるし、奴のプライドもズタズタだろう。第二第三に気を付ければ問題ない。」

俺たちは今日の出来事を話しながら家に帰るのであった。

6 一帰宅部のエースを目指せ!

「部活を作ろう!」

決闘騒ぎがあった2日後の昼休み、祐司は俺達に対してそう宣言した。

「それは誰に対する宣言だ?」

俺はそう尋ねた。

「ここにいる、大貴を除いた4人に対して言っている。」

「いやいや、俺は中学の時みたたく帰宅部のエースとして活躍しなければならぬ。したがって、残念ながら俺は参加できない。」

俺がそう答えるのがわかっていたように祐司は言葉を続けた。

「ハルは勿論そう答えるのはわかっていた。だが、部活を作るのに必要な人数は最低5人だ。つまりハルには強制的に入ってもらわ

」

祐司はにやにやしながら言う。

読まれていたか……。実際俺は部活にあまり参加したくない。

基本的に俺は面倒くさいことは嫌いで、部活を続けるだけの根気もない。そんな俺が参加したところで人数合わせにしかならぬ。

「100歩譲って参加するでしょう。けど実際何の部活を作るんだ? 大体はもう既に存在するだろう。同じような活動をする部活を作ったところで無意味だ。」

俺はそう反論した。

「まさか、この俺が何も考えていないとでも思ったか? もう既に決めている。SOO団だ!」

「お前そんなネタやるんじゃないよ。」

俺は思わずツツコミをいれてしまった。裏拳つきの。

「さっきのは冗談だ。流石に気を付けないと裁判沙汰になるからな。まあ、実際のところは決めていない。理由としては、部というある程度自由に何かできるものが欲しかった、というところだ。活

動実績など後からいくらでもでっち上げられる。欲しいのは部とあわよくば部室だけだからな。他の皆も入ってくれるか？」

「何で俺は強制的で、他はちゃんと意思を聞くんだよ・・・。」
俺がそう不満を言ったが、スルーされた。

「俺はそれで構わないぜ。」

「ハルが入るんだったらそれでいいわ。」

「私も面白そうだから入る。」

どういうことだ！？何故ほかの連中はこんなに食いつきがいいんだ？

この時から祐司は部活作りに奔走するようになった。



祐司の提案から3日後、遂に部が創部され、ついでに部室までもぎ取ってきたらしい。

「一体どんな悪いことをやったんだ？」

俺は祐司の報告を受け、ジト目で睨んでやった。

「悪いことは心外だな。俺は誠意を持って生徒会長や廃部寸前の部の部長などに交渉しただけさ。」

「誠意を持って交渉したくらいでこんな好条件転がり込んでくるわけねえ。そんなことできたら戦争は終わるっての。」

「はっはっはっ。違いない。」

祐司は全く悪びれた様子もなく笑っている。

「結局部の名前と活動内容はどうするんだ？」

「名前は、帰宅部だ。まあ、このネタはかなりいろいろと使われ

ているが、ハルは帰宅部のエースになりたいらしいからな、微力ながらその手伝いをしようと思ってね。」

くそ。ハメられた。あの時の発言がこんな形になって帰ってこようとは。

「名前はいいけどよ、何やるんだ？」

颯が疑問に思ったらしく、祐司に聞いている。

「そうね。名前だけじゃ何がやりたい部なのかさっぱりわからないわ。」

彼女もそう思ったらしく、聞いている。

「帰宅するための部だが、生徒会に提出したときの内容としては『帰宅途中における学校周辺の様々な調査』だったかな。」

「帰宅するための部に部室は必要あるのか？」

既にサッカー部に入部している為、一人蚊帳の外だった大貴が質問する。

確かに。帰宅部に部室ははっきりいって必要ない。祐司の奴は一体どんな手段をとったんだ？こんな不利な条件があるのに、部室を手に入れるなんて……。正直言って俺には非合法な手段しか思いつかない。全く……。昔から祐司はこういう状況には強い。

「勿論必要ない。だけど言ったら？俺は部活の内容などどうでもいい。部室こそが俺にとって必要だったのさ。だからこそ、無理矢理ハルを誘って部を作ったんだ。」

祐司はそう言う。

「部室に随分と拘っているようだけど、部室で何すんの？」

今まで傍観者になっていた椋本が祐司に尋ねる。

「よくぞ聞いてくれた。とまあこれが言いたかったことだが。」
祐司は咳払いをした。

「帰宅部の活動は集団下校でいいんじゃないか？あと、ここからが大事だが、部室はこれからの俺たちの活動拠点として使う。そうだな……。例えば生徒会選挙において陰で俺たちが暗躍するとして、その時にアジトとして使うといった感じだな。」

「随分と面白そうなことを考えてるんだね。」

椋本が驚いたように言う。

「やれやれ。高校でもそんなことを考えているのか。気をつけろよ。高校は義務教育じゃないから、停学や下手したら退学だってあるんだからな。」

大貴が祐司に忠告する。

「そんなことわかってるさ。ようはバレなきやいいんだよ。」

祐司が手をヒラヒラさせながら言う。

相変わらずだよ。そんなこと言って中学の時俺達4人が教師に呼び出されて、何時間も説教食らわされたのは忘れない。肝心なところで抜けているからな。また、俺がフォローしないといけないのか・・・。

「忘れちゃいけないのが、ハルを帰宅部のエースにするってことだな。」

祐司が茶化してきた。

頭が痛くなってくる。反論のセリフを使ってここまでからかってくるとは・・・。

俺は何とも言えず、先行きが不安になってくるのであった。

6 一帰宅部のエースを目指せ！（後書き）

今回はヒロインがあまり目立ちませんでした。たまにはこんな感じもいいかな、と一人考えています。

相変わらずの自己満足作品ですが読んでいただけると幸いです。

7 一罰ゲームには気を付けよう

遂に部活動スタート！

とは言っても、放課後にいつものメンバーで集まって駄弁るだけ。

「これ本当に部活の意味あるか?!」

俺は心から叫んだ。

いやこれ特に部を作る必要なかったよね。完全に巻き込まれただけだよ。理不尽ここに極まり。名前だけ貸して幽霊部員でいいんじゃないね？

「だから言ったら。俺は部室が欲しかったただけだって。」

「けどこれは部活としてどうなんだ？」

俺は他の部員たち（とは言っても3人だが）を見ながら言う。

3人はいつの間にか持ち込まれた人生ゲームをしている。

いやいや、人生ゲームってどういうことだ？今日のこいつらの荷物にこんな形状のものはなかった。それにみんなでワイワイやるならトランプだろ。皆で大富豪とかババ抜きとかやるのが普通だよ。なのに何故誰が持ってきたかもわからない人生ゲームをここでやってんだよ。

俺は色々言いたいのをぐっと堪えて言った。

「誰がこの人生ゲームを持ってきたんだ？」

「勿論俺だが？」

祐司かよっ！そう言われれば、今日のコイツの荷物は妙に多かった気がする。

「人生ゲームだけじゃないぞ。家庭用ゲーム機だってあるし、トランプだってある。それにメジャーなものからマイナーなものまで様々なボードゲームを用意してある。」

「それはすでにゲーム部に名前変えた方がいいだろ。」
すると、祐司は悲しそうな顔で言う。

「残念ながら、ゲーム部は既にあるんだ。それに、ハルは帰宅部

のエースになりたいって言ってたからな。泣く泣く帰宅部にするしかなかった。」

「いつまでそのネタ引きずるんだよ！」

「いいじゃない、別に。私もハルにエースになってもらいたいし。」

彼女が笑いながら言う。

「人生ゲームやってたんじゃないのか？」

「私が一番であがったのよ。加奈はもうちょっとかかるかな。あと、佐藤君は開拓地送りね。」

マジかよ。相変わらず颯はゲーム弱いな。今までやってきた様々なゲームで一度たりとも俺達に勝てなかったもんな。

「流石は颯だ。期待を裏切らない。」

祐司が頷きながら言う。

「あら、そうなの？」

「ああ。昔から颯はゲームの類は弱いんだ。アイツが勝ったところなんて見たことない。」

祐司が彼女にそう説明しているところで、人生ゲームは終わったらしい。

「また勝てなかったー。」

颯が頭を抱えながら叫ぶ。

「お前が勝てないのは今に始まったことじゃないだろうが。」

「それでも悔しいんだよ。」

颯はキッと睨みつけてくる。

「今度は5人で大富豪でもしない？貧民と大貧民には罰ゲームでもしてもらってさ。」

棕本がそう提案してくる。

「そうだな。罰ゲームの内容はどうしようか？」

「そうね。富豪が貧民、大富豪が大貧民に何でも一つ命令できるってどこでいいんじゃない？」

おいおい。大貧民だけじゃなくて貧民も罰ゲームの対象かよ。こ

れは気を付けなければならない。ここらで一つ提案しておくべきだろう。

「なあ、3回勝負で3回目の結果で誰がどの地位か決めた方がいいんじゃないか？1回だとちょっと面白味がないからさ。」

頼む。この条件をのんでくれ。そうじゃないと命令される回数が増えて必然的に俺が命令される可能性が高まる。そんな危険は冒したくない。

「それでいいわよ。」

彼女はどうかやらの提案を呑んでくれたようだ。嬉しさのあまり、俺はそのとき彼女が怪しい目をしていたことに気が付かなかった。



「くっ。次で最後の勝負か・・・。」

俺は今窮地にいる。なぜなら、俺は現在貧民だからである。このゲームってさ、一旦落ちるとなかなか上がれないゲームだよな。ホント現実をよく表してるよ。このままだと、また貧民になってしまう。それだけは絶対に避けたい。

現在の大富豪は彼女で、富豪が棕本、平民が祐司で、大貧民が予想通り颯。

この状況だと多分勝てない。でもどうしようもなかった。強すぎるんだよね、女性陣。赤子の手をひねるっていう表現がここまで合う状況もなかなか無いものだ。

そして、遂に最後の勝負が始まった。

俺はほとんどパスしなければならなかった。颯なんか一度もカードを出せてない。

気が付くと、上位2名はほとんど終わりそうだった。

すると、意外なことに棕本が大富豪となり、彼女が富豪となった。俺は予想通り貧民になった。

「それでは命令しちゃいましょう。」

「そうね。どんな命令がいいかしら？」

ここでやっと気が付いた。彼女が最初から富豪を狙っていたことに。颯は最初から大貧民決定だった。つまり、俺が命令される立場とすれば、貧民しか有り得ない。つまり、彼女は最初の2回で大富豪になり、最後に富豪になれば良かったのだ。

「じゃあ、颯君には女装でもしてもらいましょうか。」

棕本があっさりと颯に命令を下した。

「女装と言っても、服あるのか？」

祐司が疑問に思ったらしい。

俺は自分のことではないのでどうでもいいが。どっちかと言えば、これから下される命令の方が気がかりだ。

「あるとも。これさっ！」

棕本が掛け声とともに取り出したのはメイド服だった。

この用意の良さ、絶対準備してたな。おそらく最初から罰ゲーム有りの勝負を持ちかける気満々だったってことだ。

颯は泣きそうな顔で見ている。

「私はそうね・・・一発芸でもやって貰おうかしら。ダジャレとかいいわね。」

なんて陰湿な命令をしてくるんだ。一発芸とかウケなかったらとてつもなく恥をかく。だが、ここは腹を括ってやるしかないな。寧ろものすごい寒いシャレでも言うか・・・。

「わかった。今からダジャレを5連発する。多分かなり寒い但我慢しろ。それじゃ言うぞ。」

・ 布団が屋根にふっとんだ、やーねー。
・ 太陽を直視すると目がいタイヨウ。
・ 妖怪が話しかけてきた。何かヨウカイ。
・ これからあの世について話します。あのよう。
・ キャッチャーがミットを忘れた。ミットもない。
どうだ、驚いたか。」
俺は何か大事なものを失くしてしまったようだ。目から汗が・
・
・ 4人全員がブルブル震えているのは見なかったことにした。

7 一罰ゲームには気を付けよう（後書き）

あまりにも一話一話が短い気がしないでもないですが、こんなものだとおもってください。

8－30分前行動は基本（前書き）

長くなりそうなので区切ってみたら、予想以上に短くなってしまいました。

でも、気にせず読んでください。

8-30分前行動は基本

俺は今駅の前にいる。目的は待ち合わせだ。

何故、駅前で待ち合わせをしているのか。それは、3日前つまり思い出したくもない罰ゲームを受けた日の帰り道のことだ。彼女が「週末空いてる？」と聞いてくるもんだから、特に用事はないと答えた。すると、彼女は今日の10時丁度に駅前で待ち合わせだと言ってきた。その上、毎日のように覚えているか確認してきた。つまり、一緒に出掛けようと言っているのだろう。

そして、現在の時刻9時30分である。俺は基本的に待ち合わせなどは絶対に時間厳守するタイプだし、30分前行動を常に心がけている。だが、この状況を考えると、待ちきれなくて早く来てしまったように見えるかもしれない。

正直、そう思われるのは心外ではあるが時間を守るといふ俺の矜持のために我慢するしかない。

俺はぼーっとしながら彼女を待つことに決めた。

約15分後、彼女がやってきた。思いのほか早い。時間ギリギリに来るか、遅れるかと思っていたんだが…。

「あれ、意外と早いよね。」

「俺の持ち味は30分前行動だからな。」

「待ちきれなかったの？」

彼女がにまにましながら言う。やっぱり言うと思った。

「断じて違う。俺は小学生の時からこうだった。祐司にでも訊けばわかるさ。」

「そう。じゃ行きましょ。」

軽くスルーされたようだ。

「おいおい、どこ行くのか全く知らないんだが。」

「着いてからのお楽しみ。」

などと、彼女は言いながら俺の手をとって引っ張っていく。そういう彼女は嬉しそうに笑っているのだった。

「そんなに急ぐとスカートめくれるぞ。」

俺はそう忠告してやった。

彼女の今日の格好は藍色のジャケットに白のTシャツ、水色のフレアスカート、そして黒のニーハイソックスだった。俺の格好はどうでもいい。よくある感じのシャツとジーンズってことで。

スカートをはいている以上、注意しなければならないことは、スカートはめくれる、ということだ。小学生なんかはよく女子のスカートをめくっているからな。

「大丈夫よ。スパッツはいてるから。」

「そういう問題じゃない。めくれるのが気に食わないんだ。」

「素直じゃないなあ。」

そんなこんなで連れられてきたのは映画館だった。

「それも秘密。チケット買っておくから、売店で飲み物とか買っ
といて。」

俺は仕方がなく売店に行き、ポップコーンとメロンソーダを買った。どうでもいいことだが、このメロンソーダのいかにもなあからさまな感じが結構好きだったりする。

彼女がチケットを買ってきたので、彼女の分を含めてチケット代を払おうとすると断られた。しかし、こういう時は男が払うもんだと思っ
ているのだが……。俺は儉約家（ケチではない）なので、あまりお金を使わないが、払う時は払う。仕方ないので、自分の分だけ払った。

映画が始まった。

この映画・・・最近CMで流れてる某アクション映画じゃねえか！
こんな趣味だったとは。一応男女2人で出かけているのにもかか

わらず、アクション映画を選ぶとはなあ。

しかもめっちゃ目をキラキラさせながら見てる。

まあ、俺もアクション映画は好きな部類に入るし、特に映画のこだわりもないから楽しませてもらおう。そう考えて、俺は映画に集中していった。



映画は無事終了した。約2時間の作品だった。面白いかと言えば、CMでやってた割にはあまり面白いとは言えない作品ではあった。

予告編とかは面白い場面を破綻させずに繋げていったものだからな。だから予告編が面白いからといって本編が面白いとは限らないし、予告編が面白くないと本編は絶対に面白くない。最近の作品はイマイチなのが多い気がする。キャストと金だけじゃ真に面白い作品は作れないのだ。

妙に評論家ぶってみたことはいって見たが、要約すると残念な作品だった。それだけのことだ。

「うーん。あんまり面白くなかったわ。」

「まさか、いきなり連れられてアクション映画を見ることになるとは・・・予想だにしていなかった。」

「デートと言えば、映画でしょ。でも恋愛映画はあまり好きじゃないし、丁度面白そうな映画がやってたから、それにしたんだけど。」

彼女は申し訳なさそうな顔で言ってくる。

「デートかどうかは置いて、イマイチな映画だったことを気に病んでんのか？ 大したことじゃない。実際に見るまでそれがどんな作品かなんてわからないからな。」

「そうね。ありがと。でもこれはデートよ。」

彼女は少し元気を取り戻したようだ。

「いや、デートじゃない。ただ単に二人で出かけているだけだ。」

「それがデートなんだってば。いつまでも恥ずかしがってないで認めちゃえばいいのに。」

「俺の精神衛生上難しいな。」

「即答しなくても・・・。」

彼女は呆れたように苦笑した。

「それじゃあ、お昼でも食べましょう。」

彼女はそう提案してきた。

俺としても異存は無いので昼飯を食べに行くために映画館を出るのだった。

8－30分前行動は基本（後書き）

1話の分量は短いですが、題名に日記とか入ってるんで、まあいいかなとか巫戯けたことを考えています。

9 荷物持ちはキツイ(前書き)

今回は前回の続きです。かなり短いです。

9 荷物持ちはキツイ

俺たちは昼食を食べようと考えている。

「おい、何処で昼食べる？」

「何でもいいわ。」

「何でもいいわ、は止めてくれ。」

何でもいい、は日本人の悪い習慣だろう。相手に遠慮して自分の考えを伝えない、という控えめな態度が昔は美德とされたのだろう。だが、今はグローバル化され、国際社会となっている。故に自分の希望をしっかりと相手に伝えるのは大事なことじゃないか？

そんなことを彼女に熱く語ると、彼女は

「はいはい。」

などと言って聞き流していた。

納得がいけないが、いつまでも議論しているわけにもいかない。いい加減腹も減ってきた。そういえば、お腹の減る歌だったかにお腹と背中がくっつくなどという歌詞があったように思う。比喻表現としては面白いが、実際にそんな人間がいたら、恐怖を覚えるだろう。

「それで、結局どうする？」

「そうね。妥当にファストフードとかで良いんじゃない？まだ学生だし。」

「そうだな。学生の経財状況を考えると、出費はできる限り抑えておくべきだ。いいんじゃないか？」

「それだったら、すぐそこに店があるよ。」

彼女が指差したところを見ると、たしかによくある赤に黄色の文字が書かれている看板が見えた。

俺達は店に入ったはいが、やはり昼食時であるためかなり混雑

している。レジまでもかなりの人数だ。

「どうする？別の店にするか？」

「いまさら行ってもどこも同じだと思う。」

確かにそうだろうな。空いてるのは味がいただけない店か、近寄りがたい店（雰囲気や値段などによって）だけだ。

暫し待っていると、順番が来た。

店員は言われている通りの無料スマイルを浮かべている。それ少し分けてくれないかな。俺はいつも表情があまり変わらないようで、仏頂面だの無愛想だの言われてる。だが、無料スマイルを分けてもらえばそんなことは言われなくなるだろう。

というか、無料ってことは有料もあるのだろうか。有料があるとなれば、どんなものなんだろうか。

2人席は辛うじて空いていたので、そこで食べることになった。

「実はピクルス好きじゃないんだよな。」

「じゃあ貰ってもいい？」

「是非貰ってくれ。」

俺の好き嫌いが発動された。俺は様々な味の中で一番嫌いなのが酸味だ。酸っぱいものは嫌なのだ。つまり、ピクルスは酢につけてあり、酸っぱいので嫌いだということである。

一方、彼女はあまり好き嫌いが無いらしい。羨ましいことだ。

そんなことを考えながら、俺達は食事を終えたのだった。

「次は、何処に行くんだ？」

「勿論買い物に出かけるのよ。出られるときにしっかりと色々買っておかなくちゃいけないから。」

そういえば、彼女は一人暮らしであった。確かに勝手に誰かが買ってきてくれるなんてことはないな。自分で全部やらなくちゃいけない。俺には出来そうもない。

食事を終えた俺達は、駅前前の百貨店、所謂デパートに向かった。



一言でいうと、買い物に付き合うのは非常にキツかった。買う服にはいちいち意見を求められるし、適当なことを言ったら怒られる。その上、大量に買うから重量は大したことなくても荷物持ちとして、たくさんの買い物袋を持たされた。

さらにお約束としてランジェリーショップにも連れて行かれそうになった。俺のライフポイントはもう限界ギリギリだ。精神的な疲労も馬鹿にならない。

そんなこんなで買い物物の帰り道である。

「ねえ、今日楽しかった？」

彼女は若干挙動不審な感じで尋ねてくる。

「そうだな・・・映画はイマイチだったし、荷物持ちが大変だった。」

俺がそう言うのと、彼女は落ち込んだらしく肩を落としている。

「だけど、楽しくなかったとは言っていないぜ。」

彼女は目に見えて元氣を出した。

感情の起伏が激しすぎだろ。しかも一番楽しんだのは自分だろうに。

「今日は楽しかったと思うぞ。こうやって2人で出かけるのは初めてのことだし。」

「そうね。初めてのデートだもんね。」

「いや、だからデートではない。」

「いつまで言うつもり？これをデートと言わずして何をデートっていうのよ。」

「何か恥ずかしいからあまりデートって言いたくないだけなんだ。」

俺はこういうことに非常に疎いのだ。女子ともそんなに話す方じゃなかったし、誰かと付き合うなんてことは今までなかった。だから耐性がない。恥ずかしい限りだが。

「そういうことならデートってよけい連呼しよ。」

「やめろ。俺が羞恥心で死ぬ。」

「大丈夫。羞恥心で人は死なないから。」

俺達がこんなアホな会話をしている内に彼女の住むマンションの前に着いた。

「家に帰る前に一つだけお願いがあるんだけど。」

「俺に出来ることなら別に構わないが。」

「??して。」

「本気か？」

「本気だよ。」

「わかったよ。ほら。」

彼女が目を瞑り、俺は彼女を抱き寄せて唇を重ねた。

彼女は顔を赤くして、

「じゃあね。」

と言って、走り去って行ってしまった。

俺も多分顔が真っ赤だろう。

俺は、周りをキョロキョロ見渡すと、誰もいないことを確認して、全速力で家まで走って帰った。

10 一寝言は寝てから言え！（前書き）

感想ありがとうございます。モチベーションとか上がりますね、本当に。

それで、ご指摘のあった箇所なんですが、読者様の多くも変だと感じているでしょう。前回のラストのことです。

言い訳させてもらうなら、あれを書いているときテンションが一時的におかしくなっていたのです。予定ではあんな終わり方ではなかったのですが、一時のテンションに身を任せた結果あなっってしまったのです。

基本的にこの小説の書き方は、ネタとなる出来事をもとに大まかな流れを作って書いているのですが、キャラが度々暴走し、思い描くのは全く別の進み方によくなるのです。いつかのダジャレラストは戦慄が走りました。

作者が甘かった、と考えてもらって構いません。今回の教訓は『一時のテンションに身を任せた奴から滅ぶ』といったところでしょうか。なんか、銀魂のサブタイトルみたいですな。

話は変わって、今回は勉強会です。サブタイトルは毎回考えるのが大変です。

それでは、前書きはこの辺で終わらせてもらいます。

10 一寝言は寝てから言え!

俺は授業が終わると、颯ににやにやしながら話しかけた。

「颯、お前明日のテストの準備ちゃんとしてたか？」

「は？何それ？」

俺は予想通りの回答に内心ほくそ笑みながら、颯に現実を突きつけてやった。

「新入生歓迎テストのことだよ。もしかして、忘れてたか？」

俺はわざとらしく訊く。勿論嫌がらせの為だ。

「え？そんなのあったっけ？」

颯は処理落ちしたらしく、ポカンと口を開けたままだ。

「大分前から説明されてただろうが。覚えてないお前が悪いな。」

颯は固まったままだ。

「そういうハルは対策してるの？」

彼女は首を傾げる。

「いや、特にはしてない。する必要を感じないからな。」

「?どういうこと？」

「ハルは昔から勉強が良くできる奴だった。」

祐司が口を挟んでくる。

「うそっ!？」

彼女が口に手を当てて声を漏らす。

「失敬な。俺が勉強できちゃいけないってか？」

「そういう訳じゃないけど、意外。」

「そ、それで今回の範囲はどこなんでしょうか？」

颯が復活したらしく、今回のテスト範囲を聞いてくる。復活の呪文を唱えたのは誰だ？全くコイツは学習しないな。よく高校に入れたもんだ。どもりながら聞いてくるんじゃないやねえよ。それに、この時期のテストだ。範囲ぐらい予想つきそうなものなんだがなあ。

「そんなもん、今まで学習してきた全てに決まってんだろが。」

寝言は寝てから言え！」

颯が石化していく。終わったな、コイツ。多分ビリから数えた方がはやいな。受ける前から結果が予測できるなんて……。

「ねえ、私にも勉強教えてくれない？」

彼女が珍しく頼んでくる。

「別に構わない。どうせ颯ばかにも教えないといけないしな。勉強会でもやるか？ 付け焼刃だと思うが。」

「それはいい案だ。」

相変わらず突然割り込んでくるな、祐司は。

結局、今日は俺の家で、6人で勉強会することに決定した。

一つ、気がかりなのが優奈の存在である。気にしない方向でいこうと思うが、アイツは突然突拍子もないことをする。十分に注意しておこう。



一行は俺の家に到着した。

「おかえり〜り〜り〜」

あれ、何かデジャヴを感じる。というか前も同じことを言ってた。別バージョンはないのか？ 同じことばかりやってると飽きるぞ。

「あれ？ 今日は人数が多いね。一体どんなイベントかな？」

興味津々といった風で優奈は訊いてくるが、俺は敢えてつまらなそうに答える。なぜなら、優奈は自分が面白そうだと思ったことは必ず首を突っ込んでくるからだ。

「今からコイツらの勉強を見てやらねばならない。どっか行つてろ。」

「それはフリだね？」

「前フリじゃねえ。ほら、勉強の邪魔になるから自分の部屋にでも戻ってろ。」

「まったくコイツはどこでそんな言葉を覚えたのやら。将来が不安で堪らん。」

全員で俺の部屋に集まると、早速勉強を始めた。

まずは数学だ。苦手な奴が多いので決まった。

「ハルこれどうやって解くんのだ？」

颯、お前は二次方程式も解けないのか……。一体どうやって高校に入学できたんだろう。一瞬裏口入学を疑ってしまう。ウチの高校はそりゃレベルはそんなに高くはない。だけど、単純な二次方程式ぐらい解けて然るべきだろう。

「お前よく受かったな。奇跡が起きたんじゃないか。」

「うるさいな。受験前は多分できた。それはいいから解き方教えてくれよ。」

俺は嘆息しながら、解き方を颯に教えてやる。

ふと、周りを見渡すと、皆意外と真面目に問題を解いている。

「結構真面目にやってるな。」

「まあな。テスト前ぐらいは皆必死に勉強するさ。しないのはハルみたいな奴か、諦めた奴ぐらいのものだろう。」

祐司は問題集から顔を上げずに言う。

そんなもんか。俺は本棚から漫画を取り出して読み始めようとした。

「ハル、ここが良く分かんないんだけど。」

俺は仕方なく読もうとしたのをその場に置いて、彼女が悪戦苦闘している問題を見に行った。

問題を見るに、図形の証明問題だ。三角形の合同や相似を証明し

なくてはいけない。

「この問題はそこそ難しいな。」

俺は彼女に合同のための条件やらをいろいろと教える。

すると、隣で椋本が驚いた顔をしている。

「何だ？ そんな顔して。何かついてたか？」

「そういう訳じゃなくて。純粹にここまで勉強ができるなんて聞いてなかったし。何か納得いかないな。そんなに勉強できるならもっと上の進学校にでも行けば良かったのに。」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん。」

俺が口を開こうとしたとき、タイミング良く優奈がやってきた。

そのネタは大丈夫なのか？ っていうか、やっぱり乱入してきやがったか。極力避けたかったが、コイツがやってきた以上普通に勉強なんてできるはずがない。でも、まあいいか。どうせ今日頑張ったところで付け焼刃にしかならないだろうし。範囲が広すぎて、ヤマを張ることもできないだろ。

そういえば、ヤマを張るの『ヤマ』はもともと鉦山のことだったらしい。鉦山を掘り当てて一攫千金を狙ったことからこんな言葉が生まれたのかなんとか。

結局、その後は勉強会にならず、何故かゲーム大会になってしまった。スマ○ラでトーナメントとかやってた。意外なことに優勝は優奈だった。何時の間にやり込んでたんだろう。

後日、テスト結果が発表された。廊下に順位表が張り出されることはない、個人個人に点数と順位の書かれた紙を渡された。

「颯、どうだった？」

この学校は40人1クラスで全10クラスある。したがって、400人が学年にいるわけだ。

颯は泣きそうな顔で自分の順位を見せてくれた。下から5番目だった。上には上がいるが、下には下がいるもんだ。

「ご愁傷様。」

俺は形だけ颯を慰めてやった。

「そういうハルは何位だったの？」

「3位だ。」

彼女は目を見開いた。

「そうか。ハルの上にまだ2人もいたか。中学の時は常に一番だったからな。正直意外だな。ついでに俺は68位だった。」

祐司は聞いてもいないことを教えてくれた。

「祐司でもそのくらいか。俺は平均ぐらいだったが。」

最近影が薄い大貴も参加してきた。

「そういえば、俺に順位を訊いてきた張本人はどうだったんだ？」

俺が意地悪く尋ねると、彼女は素直に教えてくれた。

「えっと、私が121位で、加奈が84位だった。」

どうやら、椋本は見た目や喋り方に反してかなり優秀な奴らしい。

「勝手に椋本の順位を言って大丈夫なのか？」

「大丈夫。寧ろ本人から伝えてくれ、って言われたから。」

なんという自信……。俺もとあるゲームのキャラみたく大丈夫だ、問題ないとか言ってみたいな。その自信を少し分けてくれ。

俺は撃沈された颯を傍目にそんなことを考えていたのだった。

10 一寝言は寝てから言え! (後書き)

感想はドシドシ送ってくれて構いません。というか、送ってください。こんな作品でも読んでくれるのだと思うと嬉しくなります。

次回は少し時間が飛びます。GWあたりの話になるのではないでしょう。

それでは、次回で。

11 蟹の味噌汁（前書き）

更新遅れてごめんなさい。色々忙しくて更新できませんでした。これからは多分週に一回の更新速度になると思います。

今回の話はアホな話です。最近思ったんですけど、この作品って一応ラブコメのはずなのに、コメディーばっかりの気がします。ジャンルを恋愛からコメディーに変えた方がいいのでしょうか。謎です。

11 蟹の味噌汁

「今日集まってもらった理由をこれから説明しよう。」

祐司が仰々しく咳払いをしながら言う。

「今日はこどもの日、所謂端午の節句だ。勿論、今日集まってもらったことと関係ないが。」

「さっさと本題に入れよ。」

俺は少しイライラしながら言う。なぜなら、今日は休日である。家でのんびりと自堕落な生活を送ろうと考えていたところで、祐司によって無理矢理部室に集められたのだ。この場合は殴っても許されるんじゃないか？

「ハルが五月蠅いから本題に入るとしよう。今日集まってもらったのは、他でもない新入生歓迎祭のためだ。」

「新入生歓迎祭ってあれだよな。何か、体育祭みたいなやつでしょ？それならここで話すよりも、クラスで話した方がいいんじゃないの？」

椋本が至極真つ当な意見を言う。

「そういや、新入生歓迎祭って名称突然出てきたな。わからない人もいるだろう。」

それでは、ここで新入生歓迎祭とは何か説明しよう。新入生歓迎会とは新しいクラスで様々な競技や、出し物をする会である。コンセプトは新しいクラスでの団結らしい。クラスを替えたばかりであり馴染めていないだろうから、新入生を歓迎する会と一緒にやってしまおうという考えの下でできたらしい。着眼点はそんなに悪くない。

何か今、怪しい電波を受信した気がする。でもここには青春ポイントを集める男はいない。

「ああ。それぞれの競技ならそれでもいいと思う。だが、俺が狙っているのはそういうことじゃない。」「じゃあどうしたことだよ？」

祐司の勿体ぶった態度によって颯が興味を持ったようだ。

祐司はいかにも待ってましたという顔をして、口を開く。

こういう時は無視するのが一番なのに……。颯はすぐに何も考えずに質問するからな。それで、祐司の怪しい計画に乗って痛い目に遭うんだよ。少しは学習して欲しい。毎回俺も巻き添えを食らっているが……。

「俺は何かの競技に対して悪戯をしかけたと思っている。例えば、借り物競争においてかぐや姫並みの難関なものを仕掛けたりとか。そういう悪戯を仕掛けるためには、やはり一人では難しい。故に皆に協力してもらいたい。」

「面白そうだねえ。」

早くも掠本が乗り気である。ここまでノリがいいのも若干不安ではある。

「そうは言うけど、実際には何をするの？ 大体競技と言ってもこの時期に外で走り回るようなものなんてほとんどやらないじゃない。」
「どうやら彼女はまともな神経の持ち主のようだ。」

「それは既に考えてある。それは――」



「とまあ、こんなところだ。」

「それ、本気でやるつもりか？」

一応確認しておく。といっても、祐司がこうやって提案する以上、本気に決まっている。形だけ確認しただけだ。

「まあ、成功するかどうかは蟹の味噌汁だ。」

「蟹の味噌汁？何それ。」

「聞いたことがないわ。」

棕本と彼女は初めて聞いた言葉に疑問を隠せないようだ。仕方ないので俺が説明する。

「蟹の味噌汁ってのは、とある言葉の聞き間違えから発生したものだ。実際は『神のみぞ知る』ってことさ。聞き間違いつてのは往々にしてあるものだからな。」

この言葉はとある本を読んでいて、それを発見した時から、俺達はよく使うようになった。決してとある落とし神とかは関係ない。

「ちよっと面白いかも。」

棕本はしきりに頷いている。

「まあ、聞き間違えつてのは面白いものだからな。」

と、俺は同意してみる。

「こないだ、恥ずかしい聞き間違いをした人もいることだし。」

俺は彼女に話を振った。

「え・・・そ、そんなことなかったけど・・・。」

彼女は動揺している。

「確か、あれは俺がくしゃみをして、『鼻かみたいから、ティッシュくれ』と言ったんだよな。そしたら、突然顔を真っ赤するだから、どうしたのかと思ったけどなあ。」

「ちよっと聞き間違っただけでしょ！『な』が『だ』に聞こえたかなんだっていうのよ！」

いけないいけない。怒らせてしまったようだ。あんまりからかい過ぎるのも考え物だな。

「ふむ。人間は母国語でさえも七割程度しか聞き取れていないらしいからな。後は脳による補完らしい。だったら、多少の聞き間違えなど大した問題じゃないと思うけどな。」

畜生。俺が言おうと思ったことを祐司に言われてしまった。しかも何か少し自慢げだな。そんな知識ひけらかして楽しいか？

「楽しいとも。少なくとも、優越感には浸れる。」

「まあな。人間ってのは自分よりすごい人間がいるのを認めるかどうかかわらないけど、どんな奴でも自分より下の人間がいると必ず思ってる。面白いよな。そんなどうでもいいことは置いといて、重要なことはもう終わったから解散するか？」

「いや、何らかのゲームでもやろう。そうだな・・・しりとりでもやってみるか。」

「いやいや。この年齢でしりとりはきついだろ。」

「敢えてここで挑戦するのが漢おとこつてもんだろ。じゃあ、俺からで『リンゴ』」

結局高校生でしりとりなんかやる羽目になってしまった。

順番は祐司？ 棕本？ 俺？ 颯？ 彼女となった。

「ゴマ」「鱒」「スイカ」「貝」「イルカ」「過酸化水素」「ソース」「スパイク」「車」「マイク」「クジラ」「ライス」「スルメ」「メダカ」「カン」「ンザンビ」「ビスマス」「す・・・すってなんだ？ もう無理だ。」

「なかなかやるな。やはり颯は弱いが、結構善戦したんじゃないかな？」

「今の何か突っ込みどころがあるんだけど。」

どうやら、彼女には今のしりとりで腑に落ちないところがあるらしい。

「ンザンビって何？」

これには言った張本人である棕本が答える。

「えーっとね、アフリカの神様のことでね、ゾンビの語源かな。」

ゾンビか・・・。ゾンビと言えば、ジョージ・A・ロメロの作品『ゾンビ』だよな。あと、有名どころはルチオ・フルチの『サンゲリア』とかかな。

と言うか、誰か俺の華麗なる『す』攻めに気付いて欲しい。しりとりは相手に対して語尾を一つの文字に集中させると勝ちやすいんだよな。でも誰も気づいてはくれなかった。

「それはいいとしても、しりとりって『ん』で終わったらダメなんじゃない？」

「いや、続けられるなら何処までも、が俺達のキャッチフレーズ。その程度で終わらせるわけにはいかないのさ。」

そんなこと語ってないで、しりとりは終わったんだからさっさと帰りたい。

俺のそんな目に気付いたのか、祐司は

「まあ、とりあえずしりとりは終わったから帰るか。」

と言い残し、一人で帰ってしまった。

一体何のためにしりとりをしたのやら・・・。

11 蟹の味噌汁（後書き）

今回彼女がした聞き間違いは作者の実体験です。友人がその時言った言葉を勘違いして、同性なのにそんなことを・・・と驚いたのは記憶に新しい。その後、さんざん冷やかされました。

話は変わりますが、次回はまたもアホな話の予定です。歓迎祭は少なくとも次々回以降でしょう。

それでは、次回また逢えることを願って。

12- 『運転手さん、前の車を追ってください』って一度は言ってみたい（前妻

今回の話の内容とタイトルはあまり関係がありません。ただ、こうしたかったからです。反省も後悔ありません。

12- 『運転手さん、前の車を追ってください』って一度は言ってみたい

歓迎祭が間近に迫るとある日の帰りである。俺はとても珍しいものを見ていたのだった。

「ねえ、あれ中谷君じゃない？」

「ああ。最近何かそこそやっているとは思っていたが……。どうにも怪しいな。後をつけてみようぜ。理由がわかるはずだ。」

「悪趣味だつてば。」

そう言いながらも、彼女はノリノリだった……。

俺達は祐司の後をつけながら、最近の祐司の不審な行動に思いを巡らせていた。

この間のしりとりの時も不自然であった。暇つぶしであるなら、別のゲームもたくさんあるのだから、そっちをやればいいだけの話だ。もしかしたら……。

と、ここまで考えてから、現在の祐司の様子について考察してみる。

祐司は現在異様にコソコソしながら、花を買い、歩いている。俺達が最初目にしたのは、花屋で花を買う祐司の姿であった。俺があまりの驚愕に言葉を失ってもなんら不自然ではない。祐司は今、まるで警戒していない。買うまではきよろきよろしていたのにな。どうやら、俺達には全く気が付いていないようだ。何処へ向かっているのか良く分からないまま俺達もついていく。

二十分程歩いただろうか。俺達は、ある建物の前に辿り着いた。その建物とは病院であった。

「中谷君何でこんなところに用事があったんだろう。誰か家族が入院してるの？」

「いや、祐司の家族は全員健康体だったはずだ。少なくとも、誰一

人入院はしていない。」

しかし、俺も疑問を隠せない。俺と祐司の共通の知り合いで入院してるなんて聞いたことがない。それに、親戚や友人、知り合いならこそそそする必要がある。

やがて、俺は一つの結論に辿り着いた。

「女だな。」

「えー。それはないと思うよ。」

「いや、間違いない。花はお見舞い用だとしても、コソコソする必要がない。それなのにあんな挙動不審な行動をするってことは、バレたくないってことだろう。とすれば、結論は一つしかない。女だ！」

「そうなのかな？」

彼女はまだ納得がいかないようだ。

「だが、こんなところで話していても仕方がない。突入して、ことの真相を掴まおうぜ。」

俺の提案に彼女が頷いたのを確認して、俺達は病院に足を踏み入れたのだった。



「で、つまり追いかけてきたと・・・。」

祐司は怒りを堪えているようで、口元がピクピクしている。

「勿論だとも。こんな面白そうなイベントは逃すわけにはいかない。ついでにお前の弱味も握れそうだったしな。」

「そうか・・・。」

祐司は今にもブチギレそうに見える。

「まあまあ。中谷君も落ち着いて、ね。」

病室の主から祐司は宥められた。

そんな様子を見ながらここまでの流れを、俺は祐司の無言の威圧に耐えながら思い出してみる。俺は気が弱いからこれだけで参ってしまいそうだけどな。

「それはないわ。」

彼女から予想だにしないツツコミをいただいた。

そんなことは置いといて、結局、祐司の後をつけると、祐司はある女性の病室に入っていくのが見えた。その人物を見たとき、俺は不覚にも驚いてしまった。

祐司が会いに行った人物は意外にも俺も知っている人だったのである。俺達の中学三年の時のクラスメートであった。ついでに生徒会長でもあった。俺達と彼女には浅からぬ縁がある。

縁についての具体的な内容は後回しにするとして、何考えてたっけ？ああ、そうだ。この現在祐司に圧力をかけられている状況になった原因となる行動を思い返していたんだった。

俺は祐司が会いに行った人物を見て思わず叫んでしまったのだった。

「あんた入院してたのかよ！」

「病院では静かにね。」

叫んだあと、病室の主に注意されてしまった。

「ハル君はどうやら中谷君についてきたようだね。おや？そちらの女性は一体どなたかな？」

「私ですか？私は片桐沙紀です。あの・・・あなたは？」

「失礼。申し訳ないね。名乗るのを忘れていたよ。私は瀬野^{せの}晴海^{はるみ}だ。ハル君や中谷君たちと中三の時、同級生だった者さ。それと、現在は同じ高校の生徒だよ。」

「え？マジで？知らなかったぞ。」

「だろうね。君は自分の興味が無いことは知ろうとはしないからね。だけど、薄情だと思わないか？私の方には君の悪名が轟いていて知っているのに、君は私がどこに進学したかも知らないなんて。」

「？ということは私のこと知ってたんですか？」

「そうだね。君を騙すつもりはなかったんだけど。気を悪くしたなら申し訳ない。ハル君の可愛い彼女さん。同じ学年なんだから敬語なんて使う必要はないよ。」

彼女はからかわれて顔が真っ赤である。リンゴあるいはトマトのような顔色だ。でも赤りんごとトマトって色が違うな。それにトマトだって赤だけじゃなくて黄色もあるし。それを言ったらリンゴも青リンゴがあるもんな。そういえば、グミでリンゴ味と青リンゴ味が一緒に入ってたことがあったけど、あれはアリなんだろうか？最早訳がわからない。

予想外の方向に脱線しかけた思考を現実に戻しながら尋ねる。「そういえば、何で入院してるんだ？不治の病にでも罹ったか？世界の中心で何か叫んでくればいいんじゃないか？」

すると、瀬野はため息をつきながら事の真相を教えてくれた。事の真相なんて言い方をしたら大げさに聞こえるが実際は大したことではない。要は何故入院しているか、と言うことである。ただ、大仰に言ってみただけだ。

「やれやれ。そんなことあるはずがないだろう。ここが何病院かちゃんと確認したか？ここは整形外科病院だぞ。私は歓迎祭の練習中に怪我をしてな。膝の靱帯を損傷したらしい。まあ、私はスポーツをやっているわけではないから問題はそんなにないんだが、手術をしなくてははいけないらしい。だからこうして入院している、というわけさ。」

「へえ。それで手術はいつだ？」

「明日だ。というか、随分と軽く流すな。」

「そりゃあな。深刻ぶっても治るわけじゃないし。それよりも重要

なのは、祐司がお見舞いに来ているという事実だ。知っているなら俺達に教えてくれても良さそうなのに、情報を隠蔽し尚且つ一人だけ隠れてコソコソとお見舞いに来ていることが腑に落ちなくてね。」

そこでやっと、俺が祐司に睨まれている状況へと帰還することになった。おお怖い。これが蛇に睨まれた蛙ってやつか……。貴重な体験をどうもありがとう。

「礼はいらん。」

「え？ 問題にするのそこ！？」

彼女は叫ぶ。

「病院では静かに。」

瀬野に注意される。皆も病院では騒がないように気を付けよう。

「で？ 結局どういうことなんだ？ 予想は出来ているが……。」

「どうもこうもないさ。予想通りだよ。」

瀬野は肩を竦める。

「ちよっと勝手に分かり合わないでよ。結局どういことなの？」

「まあまあ。嫉妬はほどほどにね。で結局どういことかって、つまり中谷君と私は君たちのような関係ってことさ。」

「嫉妬じゃない。」

彼女は遂に拗ねてしまった。瀬野は悪かったなどと謝っているが、俺は全然別のことを考えていた。やっぱり強い個性は必要なんだろうか、と。この瀬野は女のくせに妙な口調で喋るからな。別に男女差別とかはどうでもいいが、このもったいぶった言い方はやめてほしいと思う。面倒くさいし。

愚にもつかないことを考えている内に彼女も機嫌を直したらしく、瀬野に確認している。

「付き合ってるってこと？」

「That's right.」

じれったくなってきたので俺がそろそろ本題に入る。

「で、いつからだ？」

「二週間前ぐらいじゃないかな？」

純粹に驚く。

「あれ？あの事件からじゃないんだ。意外だな。」

「あの事件って？」

「後で説明するから、今はちょっと静かにしてくれないか。」

彼女は俺の返答が気に入らなかったらしく、頬を膨らませた。結構可愛かった。実際子供っぽいと思うけどな。現実でやってたら普通は引く。

「そうだよ。私からだけだね。こういうのは普通男性からだと思うんだけど、その考えはちょっと時代錯誤な気がするよ。」

「なるほど。馴れ初めなんて聞いても仕方ないから質問するが、この間の不自然なしりとりは時間つぶしだったってわけか？」

「そうだ。予定の時間より少しばかり早くてな。だから終了をある程度操作できる遊びにしたってわけさ。」

謎は解けた。

その後、祐司は聞いてもいないことを延々としゃべり始めた。惚気話なら余所でやってくれ、頼むから。聞く方にとっては苦痛以外の何物でもないんだよ。

気が付いたら、大分日が傾いている。

そういうわけで、非常に疲れる一日となったのだった。

12- 『運転手さん、前の車を追ってください』って一度は言ってみたい（後妻

この話をいれるかどうか結構迷ったんですが、前回の微妙なラストと若干関わり合いがあるのでやっぱりいれることに決めたのです。

ここで次回予告をさらっと思いたいと思います。

次回の予定はもちろん瀬野さんと彼ら四人の関わった事件についてです。

それではまた逢えることを願って。

13 お悩み相談は一口1000円から（前書き）

タイトルをいつも一味違うものにしようと頑張っているのですが、なかなか上手いこといきません。修業が必要なんですかね。山籠もりでもすればいいのでしょうか。

13 お悩み相談は一口1000円から

病院の帰り道、俺は彼女に例の事件の詳細を教えてくれと頼まれていた。

「ねえ、瀬野さんと関わった事件ってどんな事件だったの？」

「語るも恐ろしい、とても忌まわしく危険に満ちた事件だった。とても俺の口からは語ることができない。残念だ。」

俺は素気無く断る。実際大した事件でもなかった。ちょっとした日常の延長線上みたいなものだったからな。わざわざ言うほどのものでもない。

ところが、彼女にとってはそうではなかったらしい。

「教えてってば。いいじゃん、減るものでもないんだし。」

「確かに減るものではない。だが、わざわざ言うほどの事件でもなかった。だから言わない。」

「何でそんなに秘密にしようとするの。・・・もしかして言わないんじゃないの？」

「言わないんだよ。」

「心の中に何かやましいものがあるからじゃない？」

いい加減彼女の勘繰りがあさつての方向にいきそうだったので、俺は根負けして話すことを決めたのだった。

「わかった、話すから。けど聞いてからガツカリするとか無しだぞ。本当につまらない話だからな。変な期待してるとマジでがっかりするからな。」

俺は一応注意しておく。ここはアメリカ社会ではないから、説明をしっかりとってないからといって裁判で負けて多額の慰謝料を取られることはない。だが念には念を入れてだ。み〇みけのごとく過大な期待はお断りなのである。

「そう、あれは中三の夏のことだったかな？ いや春のことだったかもしれない。もしかしたら秋のことだったかも・・・。」

「いいからさっさと話しなさい。」

駄目だったか。ソウ○イーターのエク○カリバーのようにウザく始めてみようと思ったんだが……。

「あれは中三の時だった……」



当時俺達は中学でも一、二を争うほどの問題児集団だった。自分で言うのもなんだが、確かに問題児ではあった。職員室に呼び出された回数は最早覚えきれないほどだったし、反省文を書かされた回数も同じく、といった感じだった。

その頃のことである。俺達は一応生徒会長である瀬野と同じクラスだった。まあ、同じクラスとはいっても会話なんてほとんどなかったし、向こうからしてもただの問題児集団としか見ていなかっただろうな。

ところがだ、事態がここで急変するんだな。具体的な日にちなんてのはもう覚えてはいないが、瀬野が俺達に話しかけてきた。それ自体は別段特筆すべきことじゃない。問題はその内容だった。

何？ もったいぶらずにさっさと言えばだ？ 今から話すから待ってろ。



「君達四人に相談があるのだが・・・。」

俺は少し驚く。それは他の3人も同じだっただろう。瀬野はいつも生徒会長らしくハキハキしている奴だった。だがこのときの瀬野は珍しく齒切れ悪く話しかけてきたのだ。しかも俺達にだ。

「何だ？俺達はお悩み相談はやってないぞ。」

祐司が代表して返答する。

「そんなことはわかってる。けど君たちくらいしか解決する手段を持っている人はいないんだ。話だけでも聞いてはくれないか？」

「まあ、俺達で良ければ、だが。」

「すまない。では後で生徒会室に来てくれないか？」

「いいぜ。」

瀬野はその返事に安心したのか、あからさまにほっとした顔をして自分の席へと戻って行った。逆に微妙な顔をしているのは俺達だった。

あの瀬野が問題児である俺達に相談するようなことがあるとは到底思えない。だが、瀬野の顔はかなり深刻そうだった。一体どんな悩み事、あるいは問題があるのかさっぱり想像もつかない。アイツは所謂万能生徒会長と呼ばれるほどの才媛だ。果たして俺達にそれを解決できるのか・・・？基本的に壊し屋とか愉快犯とか言われているからな。どう考えても適任とは思えない。

そんな考えが表情に出ていたのか、祐司が話しかけてきた。

「どうした、ハル。やっぱりお前も何が何だか良く分からないって顔してるぞ。俺も良く分からないが。ただ、一つだけ心当たりがないでもない。おそらくそのことだとは思うんだが・・・。まだ確信を持ってないんだよ、俺も。」

それだけ言うと祐司は次の授業の準備を始めた。

俺達もその動きを見て、思い出したかのように準備を始めるのであった。

その日の放課後のことである。俺達は瀬野に呼び出された生徒会室に足を踏み入れた。よく考えてみると、俺は生徒会室に呼び出されたことがほとんどないことを思い出した。忍び込んだことは何回かあるが……。改めてしっかりと見渡してみる。意外と新鮮な気持ちだ。

「それで俺達をここに呼び出した目的を教えてくださいませんか。」

祐司の言葉に俺は現実へと舞い戻った。

「そうだな。これから話すことは出来る限り他言無用にしてほしい。機密保持の関係とかプライバシーの問題とか色々あるのでね。だからこそ、こんな場所を選んだのだ。今日は私と君たち以外誰もここには来ないからな。」

「前置きはいいい。さっさと本題に入ってくれ。」

気が付くと祐司と瀬野の対決っぽい感じになっている。なんか俺を含めた3人は蚊帳の外だ。手持無沙汰になった俺達は欠伸をしたり、壁に寄りかかって目を閉じたりしてる。フリーダムだ。

「そう焦らないでくれ。まず確認したいのだが、中谷君、君は例の噂について何かしら知っているんじゃないか？」

「まあな。やっぱりか……。」

「例の噂ってなんだ？」

ここでまさかの颯による空気の読めてない発言が来た。二〇ニコ動画だったら画面いっぱいにキター！って字幕が入るレベルだぞ、これは。颯恐ろしい子……。こんなもん話が終わってから聞けばいいじゃねえかよ。今聞くとか話の腰を折る気満々だろ。

「おや？知っているのは中谷君だけなのかな？まあ、それも含めて君たちをここに呼び出したからな。その質問は全くもって当然のことだな。それじゃ説明しようか。」

ここで一旦咳払いをすると、説明を続けるのだった。

「まずは噂についてだが、君たちは最近生徒会で裏帳簿が作られているという噂を聞いたことがないか？今回の相談は主にそのことに

ついてなんだが。」

「俺はないな。」

颯は即答だった。

「ふむ。それに近い噂は聞いたことがあるかもしれないな。生徒会がリベートを受け取っているだとか何とか。そんなことは部活でも一部の人間が話していた、と思う。確か。」

やや自信なさげに大貴は言う。

一方俺は全く聞いたことがない。部活も特にやってないし、知り合いもそんなに多い訳でもないからな。情報収集能力が低いな。こんなんではこれからの情報社会を生きていくのは困難かもしれない。まいったな。

「俺は聞いたことがない。」

俺はそう答えざるを得なかった。

「そうか。まだそんなに広まっているわけではなさそうだ。で、ここからが本題だ。君達にはこの噂の真偽を私と協力して調べてもらいたい。頼めるか？」

「どういうことだ、そりゃ。何で生徒会についての噂なのに生徒会長であるお前がその真偽を確かめなくちゃなんのだ。」

俺は思わずそう答えていた。至極もつともな意見だと自分では思う。だっておかしいだろ。生徒会に関する事なのに生徒会長が知らないとか笑い話ですか？って言ってるようなもんだろ。

だが、瀬野の顔を見る限り、笑い話ではあるが笑い話ではないようだ。ややこしいな、これ。

「それは完全に私の力量不足としか言いようがないな。はっ。思っ存分笑ってくれ。私は身に覚えもない噂をたてられるような無能会長だと。」

「まあまあ、そんなに自虐的になるなよ。結局どういう状態なんだ？」

上手いな。こうやって傷心の女の子を慰めてムフフな展開に持ち込むのか。参考になった。流石は祐司だよ。

「そんなこと考えてないから。」

あれ？口に出してたかな。まあいいや。

「つまり、私は特に噂になるようなことはしていない。けれど、あの日のことだ。生徒会には裏帳簿があるなどという噂を私は耳にしましたのだ。勿論初めはそんな馬鹿な、と思ったさ。だけれど、火のないところには煙は立たないと言うだろう？急に心配になった私は色々調べてみたのだ。すると、証拠はまだ見つかってはいないが、どうも本当らしいのだ。これはマズイと思った私は君たちに協力してもらおうと相談を持ちかけた。これが真相さ。」

「話はわかったが、何故俺達なんだ？他にも協力してくれる奴なんてたくさんいるだろ。」

しかし、俺の言葉に首を振る瀬野。

「この件は非常にデリケートなんだ。明るみに出れば私だけじゃない、多くの人に迷惑がかかる。もしかしたら教師や親まで何らかの影響が及ぶかもしれない。故に、条件として口が堅いことと調査能力がずば抜けていることの二つが上がるんだ。そしてこの二つを同時に満たすような存在は君たち以外に思い浮かばなかった。だからだよ。」

「まあそうなるだろうな。任せとけ。調査能力がそんなに高いかどうかは疑問だが口は堅いぜ。とは言っても、明確な証拠を見つけれぬかはわからないがな。」

祐司の言葉に瀬野の表情は若干和らいだ。

「それじゃあ明日から調査していくぜ。野郎ども、お前らの本気を見せてみる。」

「そうか。よろしく頼む。」

何に影響されたのか良く分からない祐司の言葉の後、俺達はその問題について調べることとなったのである。

13 お悩み相談は一口1000円から（後書き）

何か思いのほか長くなりました。そのせいで分けることに・・・。
ホントは分けなくても良かったのですが、一話の分量をどうしても
短めにしようと無意識のうちにやらかしてしまっようなのでこのよ
うな結果に。

次回は解決編？ですかね。

14ーお食事券をプレゼント（前書き）

今回は前回の続きです。注意してお読みください。

14 お食事券をプレゼント

俺達は祐司に言われたとおりに調査を開始した。だが、万能生徒会長（笑）ですら見つけられなかった証拠を俺達がそんな簡単に見つけられるはずもなく……。時間だけがただ過ぎていくのであった。

「今、万能生徒会長の後に笑って入れただろう。全く、貶すのか褒めるのかどっちかにして欲しいものだよ。それじゃただの残念な人にしか見えないじゃないか。」

「いやいや。馬鹿にただけだぞ。」

「なお悪いじゃないか。私が君に馬鹿にされる所以なんてどこにもないだろう。寧ろ君の方こそ馬鹿にされるような行動ばかりとっていると思うのだけど。」

「俺はちゃんと自覚してるから。自覚のない方が問題じゃないか？」
「くっ。正論を……。」

いろいろな書類を見て、不審な点やら何やらを探してはいるが、あまりにも退屈なので瀬野をいじってみる。と言うか、こんなことでもして退屈を紛らわせていなければ発狂してしまうかもしれない。そういう理由で仕方なしに瀬野をいじらなければならないと自分に言い聞かす。

「君は本当に失礼な人だな。感心してしまうよ。」

「そんなに褒めんなよ。照れるぜ。」

「馬鹿話しているのはいいが、どうだ？」

祐司は真面目にも書類から顔も上げずに口を開く。

そんなに必死に探してもなかなか見つかるもんじゃないと思う。こういうのは多少不真面目にやるのがコツだ。探し物ってのは得てして探しているときに見つからないものだからな。それで、全然関係ないときにふと見つけたりするんだよな。あの時の何とも言えない気持ち。あれだけはホントにどうしようもないほどに虚しくなる。

「あまり根を詰め過ぎるなよ、祐司。意外とこういう時は思いがけないところから手がかりが見つかったりするものだ。少し休憩でも入れた方がいい。」

大貴よ。部活もやっているのに、俺達に協力してくれるなんて良い奴だよ。本当に。友人の真価ってのはこういう時に現れるとはよく言ったものだ。その通りだとも。

「気にするな。どうせもう三年なんだ。部活なんてほどほどにして皆で馬鹿やってた方がいいのさ。」

「そうだな。もうすぐ受験勉強とかしなきゃだもんな。」

「え？もしかして颯ってまだ受験勉強してなかったのか？」

「当たり前だろ。そんなの秋にやればいいってだれか言ってたし。」
颯は全く気にしていなさげに漫画を読んでいる。コイツは早々に戦力外通告を受けたために、ここ数日間漫画ばかり読んでいやる。

「それ・・・本気か？」

聞いた誰もが一瞬絶句し、何とも言えない表情になる。辛うじて、大貴がその真意を尋ねる。

「本気だぞ。何か問題でもあるのか？」

「大有りだ。お前そんなんじゃないや高校に受からんぞ。特に成績だってそんなに良くないんだから春から必死に勉強しなきゃ大分拙かった。それなのにまだ勉強のべの字さえもなかったとは。」

俺はあまりの出来事に驚きを通り越して呆れしか感じられない。
コイツ高校に行く気あるのか・・・？このままじゃどう考えてもこの先自宅警備員ぐらいしか道はない。颯が何になりたいとか何になるとかはどうでもいいが、コイツの望む道を少しでも手伝ってやるのが友人ってもんだ。

「だからお前をこれからミツチリしごいてやろう。」

「いやハルの思考なんか読めないから、だからってのが良く分からない。それにそんなに勉強できない。」

なにやら颯がほざいているが聞こえない。

「ほら、思い立ったが吉日というから今からやるぞ。」

「突然言われてもできないから。」

俺は颯の鞆から取り出した教科書やら真っ白のノートをグイグと押し付けながら宣言する。

颯はそれが不満なのか抵抗するが無視。

「マジで勉強しないと中学浪人とかわけのわからない生命体になるぞ。あるいは自宅警備員になるかだな。それが嫌だったら勉強するしかない。さあさあさあ。」

「わかったよ。一応高校には通いたいしな。」

遂に抵抗を止め、受け入れる颯。でも攻撃を受け入れたわけではないらしい。反撃してきやがった。

「ちよっ、鉛筆の先を突き刺そうったってそうはいかないぜ。」

最早目的を忘れて乱闘になりそうなところが大貴の言葉によって救われる。

「今から始めて間に合うのか？」

「当たり前前田のクラッカー。俺が受験が終わるまでしっかり見てやる。そうすれば多分大丈夫のはずだとも。」

「多分って……。こういう時は『絶対』じゃない？」

万能生徒会長（笑） に いちやもん を つけられた。

「絶対と言う言葉は絶対じゃないのだ、とか言ってみる。てか、流石に俺でも絶対の保障は出来ん。保障の対象外ってやつだ。成績ならあげてやれるけどな。」

「確かに。受験に於いて絶対はないな。」

おおー。なんだか含蓄のある言葉を大貴の口から聞くことができるとは。長生きもしてみるもんですな。

「たかが十五年如きで何を言っているんだ、君は……。」

「些細なことをいちいち気にしたら老けるぞ。ただでさえ一部の危ない人間からはその年齢じゃおばさんって言われるのによー。」

「そんなのはごく一部だろう。私はまだまだ若い。心配なんて必要ないよ。」

「原始人達って14、15歳で子供産んで30歳ぐらいで死んでたって聞くけどね。」

「君は余計なことばかり言う。大体私たちはもう原始人とは違って現代人じゃないか。だとすれば、それは当てはまらないと思う。」
相変わらずからかうと面白い瀬野と話していると、颯と大貴が騒ぎ始める。

「何だ？」

「遂に発見してしまったよ、悪事の証拠って奴をな。」

何だか妙なポーズを決めながら颯は自慢げに言う。どうせならガッツポーズにしろよ。そういえば、日本じゃガッツポーズだけど英語圏ではビクトリーポーズっていうらしいな。

「で、証拠って一体なんだ？」

祐司は一人真面目にやっていたので非常に気になったらしく、いの一番に訊く。

そりゃ、自分が見つけられなかったなら余計に気になる。

「へへ、聞いて驚くなよ。」

「御託はいいから簡潔に30字以内でまとめろ。」

「それは無理だ。大貴、頼んだ。」

あっさりと颯はまとめることは諦め、大貴にパスする。

諦めるの早すぎ。確かに『下手の考え休むに似たり』とか言うけどね、『諦めは愚者の結論』とも言うのですよ。もうちょっとは頭を使って欲しい。日頃から脳を使ってないと腐るぞ。

「不本意だが俺が話すことにしよう。颯例のブツを持って来い。」
すると颯はとある領収書を持ってきた。

「これが一体何なんだ？」

祐司も疑問に思ったらしい。同感だ。

「よく見てみる。」

「一体何なんだ？」

俺達は領収書をじっくり見てみると、不審な点が浮かび上がってきた。

「おいおい、こりゃ・・・。」

絶句するしかなかった。これは本当に巧妙だ。そう簡単には気が付かない。

「なあ凄いだろ。まさか数字を改竄するなんてな。」

そうなのだ。数字をいじっている。1を4にしたり、とパッと見では絶対に気が付かない。考えた奴は純粹に尊敬する。まさかこんな方法があったとは。ボールペンで書かれていたのが災いしたな。

「で、結局誰の仕業なんだ？」

「うん、ここまでわかったから後は私がやっておく。後で報告を楽しみにしててくれ。」



「これが事の真相だ。全然大した事件じゃないだろ？」

「結構すごい事件だと思うけど・・・。中学生で裏帳簿とかどうなの？」

「些細なことだろ。解決したしな。終わりよければすべてよし、だ。」

彼女はしきりに首を傾げているが、それより疲れた。長く話すつてのは疲れるな。喉も乾くし。講演とかで何時間も話す人を初めて尊敬したよ。

「それで、真犯人って誰だったの？」

「ん？ ああ、それは会計だよ。オチも読め過ぎてたしありきたりだし、しょぼい事件だったよ、本当に。」

生徒会会計が犯人とかありきたりすぎる結末にはあの時全員で大爆笑だったな。アイツの青ざめた顔も今でも笑いの種と言える。まさかの依頼人本人が犯人とかだったらもっと面白かったんだがな。流石にそれはなかった。残念だ。

「結構すごい体験してるんだね。それじゃ帰るかな。」

「送ってくぞ。」

「ありがと。」

あまりに話が長いせいで彼女は結局俺の家に來たのだった。ついでに夕食まで食べた。話し終わったのは既に9時だったのだ。

俺は彼女を家に送っていく。

「もうすぐ歓迎祭か……。準備も大体完了したし、楽しみだな。」

「そうね。でもあんなこと成功するのかな？」

「悪巧みってのは結果じゃなくて過程を楽しむものだからな。成功した方がいいが、成功しなくても別に構いはしない。あいつらもそう考えてる。だから心配すんな。」

「考えてても仕方ないしね。じゃあね。」

「ああ。」

そんな感じで俺達は全員歓迎祭に期待を膨らませるのであった。

14ーお食事券をプレゼント（後書き）

最近忙しくて執筆が大変です。でも一週間に最低一話のペースは守りますので。ハルヒの最新刊とか色々読んだり学校の色々とか大変です。愚痴はこの辺にします

次回は今度こそ歓迎祭の予定です。長かった。予想外の過去編とか・・・何でそんな流れになったんだろう・・・？

15 一歓迎祭の始まり始まり〜悪戯編〜（前書き）

今回の話はやっと歓迎祭に入りました。取り敢えず、今回は悪戯編です。まあ、タイトルにバツチ書いてありますが。

残念ながら、今回はタイトルは真面目にしないでほしかったのです。あんまり変なのだと、話が全然わからなくなるからです。涙を吞んで諦めました。そう言えば、悪戯編とありますようにまだまだ続きます。長いとか思わないでください。そういうものだと思います。暖かい目で見てくださいれば嬉しいです。

15 一歓迎祭の始まり始まり〜悪戯編〜

「遂に歓迎祭当日か……。仕込みはどうだ？」

「ばっちりだ。あとは上手くそれが芽を出せば言うことなし。」

俺と祐司は今日の大まかな流れを確認している。

「どうやら、祐司達の方も仕込みの方は問題がないようだ。今回の悪戯は成功した、と言えるだろう。あとは、不確定要素をどれだけ潰せるか、か……。」

「ねえ、何の話してるの？」

俺達がコソコソしているのが気になったらしく、彼女と掠本もこちらに来る。

「勿論今日の確認に決まっているだろう。」

祐司が堂々と答える。

「いやいや。堂々と答えちゃ拙いでしょ。誰が聞いてるかわからないだし。こんな些細なことで計画が瓦解するのは何としても避けたい。でも、聞き方によっては問題ない発言とも取れるな。これを見越してさっきの台詞と態度だったら、素直に感心できる。」

「拙い……。堂々と答えちゃまった。」

「あれ？何も考えてなかっただど……。まさか祐司に限ってそんなこと……。」

「考えてなかったわ。だが安心しろ。さっきの会話で読み取れる人間など存在はしない。故に問題ないと言っておこう。」

「心配するだけ無駄だと思うよ。あれでわかったら超能力者だって。」

「

確かに。心配しすぎなんだろうか。しかし、保険は何重にも掛けておくべきだろう。もしも、があってからでは遅いからな。」

「寧ろ、成功するかどうかよりも終わってからのことを考えた方がいい。ほら、よく言うだろ？『獲物を狩った時が一番危険』だと。」

「今から後始末とかの段取りを決めておけ。」

最近空気がしてきた気がする大貴の有難いお言葉である。

学校ではあっているはずなのに・・・どうも存在感が以前より希薄な気がしないでもない。

「多分部活に出ているからだろ。それでお前らのやってる怪しい部活に参加できてないから、学校の朝から放課後までの時間しか会ってない。だからそういう風に思うんだよ。」

「そうだったのか・・・。」

俺が気が付かなかっただけと。でもそれだけではない気がする。

が、ここでは黙っていた方が良いような、そんな感じというか予感めいたものがあるので素直にそれに従う。

「そろそろ開会式の時間じゃないか？」

「それにしても開会式ってどうなんだ？」

俺と祐司は再び話始める。

「一応『歓迎祭』なんて言ってるけど、実態は体育祭みたいなものだからな。必要なんじゃないか？」

「そんなもんかな。」

秘密って秘密の時はすごく気になるんだが、それが暴かれたときって大体虚しい気持ちになる。蓋を開けたら全然大したことじゃなかったり。それまでのドキドキワクワク感を返してくれ、って誰かに言いたくなるほどだ。

おそらくこれも同じものだろう。実態は祐司が言ったのと多分変わらな。『事実は小説よりも奇なり』とバイロンは語ったが、そうでもない。いつでも事実は拍子抜けするようなことばかりだ。

そんなことは置いといて。

「開会式の為に集まるんだろ？」

「そうだ。あと十分程で移動だな。」

面倒なことだ。わざわざ開会式を行うなんて。誰もがきつとそう思ってる。

「いや、特には。」

否定しないでくれ、祐司よ。



「えー、皆さん。これから歓迎祭を始めたいと思います。」

思いのほか短い校長の台詞。これはありがたい。校長の話と言え
ば、長いと相場は決まっているものだが、こんな行事の前だし、空
気を読んだのかもしれない。意外と話がわかる校長で良かった。こ
んな時に延々と話をされてもな。

「それでは、生徒会長からの開会宣言です。」

ちよつと待て。開会宣言でおかしくないか？これ一応『歓迎祭』
という名称のはずだろ。祭りなのに開会宣言なのか？謎は深まるば
かりだ。俺は隣にいる颯をつつく。

「おい、なんだよ。」

「なあ、これ、開会宣言でいいのか？」

「いいもなにもそうなんだろ？」

ぐあ。颯に訊いた俺が馬鹿だった。コイツはまるで何も疑問を持
っちゃいなかった。何も考えてないに違いない。寧ろ俺が考え過ぎ
なのか？誰か教えてくれ、ド○えもーん。

すると、大貴が真相を教えてくれた。

「これは名前こそ歓迎祭だが、生徒達の認識では春の体育祭のよう
なものらしい。尤も俺も部の先輩に聞いたただけだが。」

「いや。それでも助かった。このままじゃ、考え過ぎて、果てのな
い迷宮に入り込むところだった。」

「大袈裟すぎないか・・・？」

気付くと、会長の話は終わっていた。

「次は、スライドによる歓迎祭の進行説明です。」

放送委員の言葉と共に、スクリーンがスルスルと降りてくる。

生徒会のメンバーがプロジェクターを使って、おそらくパソコンでつくっただろうスライドをスクリーンに映し出す。

最初の2、3枚で大体の進行の説明は終わった頃だろうか。突然画面が切り替わる。

『はっはっはっ。元気かね、諸君。』

何やら、怪しい暗い部屋に椅子が一つだけ置いてあり、そこに座っているお面を被って黒尽くめの格好をした男が写っている。先ほどの台詞もそいつのものだ。ついでだが、お面は光の国から地球を救いに来た巨大宇宙人の顔だった。

『このスライド説明の時間は私が戴いた。まあ、特に理由はないがね。』

「ふざけるな！」

生徒会の人間の誰かが叫んだようだ。無駄なのに。既に録画されているものに対して文句を言ってもねえ。テレビに向かって相槌を打っている人と同じだよ。恥ずかしくないのだろうか。多分、怒りのせいでそこら辺が良く分かってないんだろうね。今の発言で、寧ろ生徒たちが我に返ってざわめき始めた。

「おい、これどういうことだ？」

「わからん。」

「とりあえず、生徒会の計画にはないものみたいだ。」

「というか、あの映ってる怪しい人だれ？」

「あんな格好恥ずかしくないのかな。」

すると、まるで現在の状況がわかっているかの如く、スクリーンに映ってる奴は喋り出す。

『諸君。ざわめくのは程々にしたまえ。ほら、生徒会の人たちが困っているだろう？』

すると、ざわめきが徐々に小さくなっていく。凄いな、ウ○トラマン。あ、言っちゃった。折角、迂遠な言い方をして暈していたというのに。

『本題に入ろう。私の目的は2つある。1つ目は、この時間に乗っ取ることだ。これは既に達成されたからもういい。2つ目だが・・・。スパ○大作戦は面白い。諸君も見たまえ。これで私の2つ目の目的も達成された。それでは楽しい歓迎祭を。アデュオス。』
そう言って、謎の男の映像は終わった。

「「「・・・」」」

全生徒の無言の時間になった。

確かに。どう反応していいかわからん。ス○イ大作戦とか一体いつの作品だよ、とか叫びたくはなるけどな。

「え、え。それでは、これから歓迎祭を始めましょう。」

あまりにインパクトのある映像のせいか、放送委員も自分達の台詞を忘れたらしく、しどろもどろである。無理もないけどな。



「見たか？あの反応。ほんと可笑しかったぜ。」

祐司は笑い過ぎてヒイヒイ言いながら、今回の成功を祝いあう。

「あれは・・・なんというか予想以上だった。」

俺はそう思う。突っ込みどころ満載だった。寧ろ、ツツコむところしかなかったとも言える。

「でも、あの生徒会の人々の反応もウケる。」

机をバシバシ叩きながら棕本も笑っている。

「でも、よくあんなの成功するよね。」

一人感心しているのは彼女だけだった。

颯は笑い過ぎて死にそうになってる。これを見ると、笑い死ぬってのが強ち有り得ないことではないように思えてくるから不思議だ。

「ということで、俺達の悪戯は成功した。俺達の勝利だ!」

そうなのだ。あのスライドでいきなり怪しい人物の映像に切り替わったのは、すべて俺達の悪戯であった。まず、あの映像を撮影し、その後あれを生徒会のパソコンに入れて、パスワードを入れないと解除でき無い様に設定したのだった。一番大変だったのが、人知れず生徒会室に侵入することだったりする。

余談だが、あの黒尽くめの怪しい奴は祐司だった。意外とノリノリで撮っていた。

俺も全校生徒のあの啞然とした顔を思い出すと、笑いが止まらない。い。

そんな感じで、俺達の悪戯は大成功を収めたのであった。

15 一歓迎祭の始まり始まり〜悪戯編〜（後書き）

次回は6月17日か18日の更新になると思います。

16 一歓迎祭く作戦確認編く（前書き）

すみません。謝罪から入りますが、今回は学校のテストが重なって予想以上に時間がありませんでした。ので、本来一つだったものを急遽二つに分けて投稿せざるを得ませんでした。よって今回はかなり短めです。

16 一歓迎祭く作戦確認編く

「改めて説明するが、今回の私達の勝利のためのプロセスはこうだ。」

学級委員長である佐々倉^{ささくら} 萌絵^{もえ}は黒板の前で宣言した。効果音にはバーンとでもついていそうな光景だな、これは。

この佐々倉は勝利にここまで貪欲だとは、これまでの練習だの、勝つための作戦などの練り具合から見て、初めて知ったよ。とは言っても、入学してから一か月ちよいしか経ってないからな。知らないのも当然っちゃあ当然ではあると思う。

だが、佐々倉からは凄まじいほどの執念を感じる。これで負けたら生霊になって祟ってくるんじゃないかと思うほどだ。

「同感だな。」

人の思考を読むんじゃねえ。

「いや、声に出してたぞ、お前。」

「マジで!？」

恥ずかしい。思考をブツブツと呟くなんてアブナイ人まっしぐらだよな。これからは注意しないと。

「そこ。真面目に私の話を聞きなさい!」

怒鳴られてしまった。結構迫力がありますねえ。

「祐司が口出ししてくるから怒られたじゃねえか。」

「お前が口に出しているのがいけない。」

俺達は小声で互いの責任を擦り付け合う。(醜い争いであることには目を瞑ろう。)

「真面目に聞け! 私達のクラスの勝利が懸かっているんだぞ!」

怒りも露わに怒鳴る佐々倉。

これは怖すぎる。主に勝利への執念に対してだが。

ところで、この佐々倉って奴は入学当初は自ら率先して学級委員だなんて面倒な役職を希望してたから、目立ちたがり屋か、内申目

当てだと思っていた。

しかし、その考えが覆されたのが歓迎祭の練習が始まってからだ。った。

佐々倉は俺達のクラスが学年一位になるための綿密な作戦を練り始めた。そしてそれを俺達に口外することを禁じる。それだけでも十分に凄いことだが、それだけでは止まらなかつたのだ。

佐々倉はそれぞれの競技の人選も一人で勝手に決め、尚且つ物凄い練習を課した。筆舌に尽くしがたいほどの暴挙だ。それほど勝ちたいのか、とこちらが感心してしまった。

「はい、一旦中断されたがもう一回説明する。」

俺達が静かになり、続けても良いと判断したのか、作戦をもう一度説明し始める佐々倉。ここまでするか。すごいな、いろんな意味で。

「まず、綱引きだ。これは今までの練習試合で勝っているからこそ、より一層の注意が必要だ。常に実力が上のものが敗北を喫する原因が慢心だ。だからこそ、気を引き締めろ。次は縄跳び。これは兎に角、声を出して皆と一緒に跳ぶ。これしかない。今までの練習を思い出して頑張ってくれ。3つ目は卓球だ。前田、大室。言うことは一つだ。絶対に勝て。4つ目はバスケ。これもバスケチームの野郎共。取り敢えず勝て。それ以外は後で考えろ。最後。クイズはチーム中谷だったか？何をしてでも、石に齧りついてでも勝て。私からは以上だ。」

無茶苦茶だ。後半とか『勝て』しか言っていないからな。どんだけ学年一位になりたいんだか。俺には理解し難いものだ。

とまあ、そんな感じで始まった歓迎祭。

どうなることやら・・・。



「そういえば、今ふと思ったんだけど……。」

「何だ？ ハル。どうした？」

「高校生になってまで綱引きとか縄跳びとかどうなんだよ。」

「いいじゃないか。童心に戻るのも悪くない。」

「お前、一体いくつだよ！」

「無論15だが。」

「童心に戻るの意味が分からん。まだ子供の俺達に、何が童心だよ。」

「高校生になったら綱引きとか縄跳びがどうか、って言ってる時点でそれを言う資格はない。」

「いや。そんなにキツパリ言われても……。」

「大体、この歓迎祭のコンセプトは新しいクラスでの団結を図るものだ。綱引きや縄跳びは多くの人間と協力して行わなければならない。だから十分理に適っていると思うぞ。」

「確かに……。それより、一番疑問なのが卓球だよな。あれは温泉でやるもんじゃないのか？」

「そう思われがちなのは否めない。しかし、或人^{あるひと}曰く、『卓球とは100mを全力疾走しながら計算を解くようなものだ。』とのこと。脳を鍛えるのに良いからじゃないか？」

「なんか扱いがぞんざいだな。もうちょっと援護してやれよ。」

「本音を言えば、俺も卓球は疑問視せざるを得ないな。だが、競技の種目の中に含まれるには相応の理由があるということだろう。」

「なるほどな。そういう考えか。それにしても悪戯が成功した時点で俺達の歓迎祭は終わったも同然なんだがなあ。」

「そういうな。心待ちにしていた生徒だってたくさんいるだろう。」

そいつらの為だと思って取り敢えず参加すればいいさ。幸い、俺達はクイズ大会にしか出ないみたいだし。」

「しかし、一体何を参考にクイズ大会のメンバーを決めたんだ？」

「俺が自薦して、他のメンバーも俺が決めた。」

「なんだ・・・と・・・？」

「そうじゃなきゃ決められる訳がない。まだ知り合って大してじかんが経っていないんだからな。じゃ移動しようぜ。」

※とある二人の会話より抜粋

16 一歓迎祭く作戦確認編く（後書き）

今回は24く26日のどれかの日にちゃんとした分量をお届けします。今回は激闘編ですかね。

17 一歓迎祭〜激闘編?〜 (前書き)

なんだか予想以上に長くなってしまった。これがキャラが動くということか。

すみません。言ってみただけです。

17 一歓迎祭〜激闘編?〜

この歓迎祭だが、日程は二日に分かれている。おかしいことだと思うが、何故か二日日程なのだ。これは既に決定事項で、変更はないらしい。

とまあ、そんな感じで一日目が綱引きだの縄跳びだの卓球だのやる予定らしい。

バスケは一部のみ終わらせるらしい。クイズ大会は二日目のメイイベントだそうだ。

まず、初めの競技は綱引きだった・・・。

「やっぱ、高校生にもなって綱引きを真剣にやるのはなあ・・・。」
思わずそう零してしまう。こんな年齢にまでなって綱引きを一生懸命にやるのはなんというか厳しいものがあると思う。

「そう言わずにね。これに向けて頑張っている人もいるんだから。」
俺の呟きが聞こえていたのか、彼女にそう窘められてしまう。

「でも、なんか恥ずかしくないか？」

何か思うところでもあったのか、俺の問いかけに少し考え込む彼女。

「少しだけ・・・。」

「そうだろ。綱引きが許されるのは小学生までだと思う。それ以上の年齢だと厳しいはずだ。」

彼女の反応に気をよくした俺は、自らの意見を語る。

でも、こんなこと言っときながら、俺は綱引きには参加しないのであった。

と言うか、参加するのはクイズ大会だけなのだ。

「そうかもしれないけど、一応応援くらいはしたほうがいいと思うよ。」

なんだかんだでそんなことを言われ、渋々応援することにする。
と見せかけて、ただ眺めるだけしかないのだった。

「それにしても、良くこんなことに夢中になれるよな。」

何とも言えない気持ちで、今の勝負の行方を見る。現在、一年だけが勝負しているわけだが、うちのクラスは果たして勝てるのかねえ。

言わずと知れたことだが、俺達のクラスは6組だ。(1ー入学式は〴〵を参照のこと)でも、知ってるってことは多分どこかで言っただろう。全然言わずと知れてねえ。

あ、勝った。

「今、6組が2組に勝ったよね。凄い凄い。」

彼女はうちのクラスの勝利によって興奮しているのか、いつもよりテンションが高めだ。このテンションについていけない俺はどうすればいいんだろうな。

「勝つために頑張ったというよりかは、負けたらどうなるかわからないから勝ったという印象を受けるな。」

「そういうこと言わないの。佐々倉さんだってどんな手を使ってでも勝ちたいと思ったから、あんな風になっちゃっただけだよ。」

「そんな単純なもんかねえ。」

彼女の意見を否定するわけではないが、素直に頷くことはできない。どんな手を使ってでも勝利することに関しては異論はない。けれど、そのためにあんな風になったとは些か賛同は出来ない。どう考えても、俺にはあれが素と思えん。どこの鬼軍曹だよ、とか思っている奴は少なくないはずだ。

そんなことを彼女にクドクドと説明している間に、6組の第二戦は終わっていた。わふーとかは関係ないので悪しからず。

結果は勝ちだった。

あんだだけ練習させられれば、負けるという姿は想像できん。だが、勝負と言うのはやってみなければ結果はわからないもので、僅かな油断が命取りになることは往々にして起こるわけだ。と、そんなことを言っても、うちのクラスにそれはない。理由としては、負ければ恐ろしいことが起こる、とわかりきっているからだが。

「ちゃんと応援しなよ。」

彼女に注意されて綱引きに意識を戻すと、いつの間にやら三回戦目というか、準決勝が行われていた。

いい勝負してますねー。

相手である9組とほぼ互角の戦いをしている我がクラス。なかなか決着がつかない模様。時間制限で勝敗が決まりそうだが、十中八九6組の勝ちだろう。僅かに勝っているのがここからでも確認できる。それだけ必死なのだろう。涙を誘うな。

「この勝負どっちが勝つと思う？」

「うーん。6組じゃない？」

「その心は？」

「ちよっただけ勝っているのが見えるでしょ。ほら。」

などと言いながら、指差す彼女。

俺が見てないけども思っているのだろうか。そんなことはそんなにないんだがなあ。

「そうだろうな。このままいけば、最低ノルマ分は行くだろう。次は、縄跳びか・・・。」

なんかガックリくる。ただでさえ微妙な綱引きなのに、その次は縄跳びとか。縄跳びも小学生までだろう。高校生にもなって真剣にやるものとは感じられない。というか、恥ずかしい。

そんなことを考えておきながら、勿論俺は参加しないがな。恥ずかしくてやってられるか。

「ほら、ちゃんと見なよ。」

その言葉と共に、彼女の手によって俺の顔が無理矢理試合の方へと向けられる。グギッと、首から鳴ってはいけない類の音が聞こえたような気がするが、気のせいだろう。気のせいだと信じたい。

「もう少し、優しくしてくれないかな。」

ダメもとで頼んではみるが。

「今ので十分優しかったと思うけど？これ以上は無理かな。」
ジト目で俺を見つめてくる彼女。

どうやら、俺がまるで競技全体に興味を示さないことに若干不機嫌らしいな。

「そう言わずにさ。次からしっかり応援するから。」

なんか駄目男になった気分だ。本当は働く気がなくせに働くよ、とかいってるヒモみたいだな。こんなことでヒモについて理解を深めても意味はないんだけどね。

「ホントに？いつもそんなことばかり言うからなー。」

あらら。信用されていませんな。日頃の行いは良いと自分では思っていたんだけど。あくまで自己評価に過ぎないけどね。

「悪いよ？自覚無いの？」

グサアって来たね、今の。流石に見過ごせないな。一日一善を地で行く俺に向かってなんたる暴言、許すまじ。

「どこまで自己評価が高いんだろう・・・？」

あきれた表情の彼女がそこにいた。

そんな話をしている内に綱引きの優勝が決まっていた。うちのクラスの優勝であった。良かった。これであの恐ろしい学級委員からの制裁はないな。

「おい、いつまでも犬も食わない喧嘩をしてないで、次の競技に移るぞ。」

どこからかの祐司の言葉に、我に戻る彼女。

状況を把握したようで、顔が真っ赤だ。

「それじゃ、次行くか。」

「・・・うん。」

いつまでも顔の赤い彼女と連れ立って移動を始めた。



次は縄跳びなんだが・・・。

これは跳んだ回数を比べてどこが最も多いか、というルールなので特に応援とかはいらないのであった。

「応援いるから。」

またもや彼女から叱責を受けてしまった。

「これは特にいらないと思うんだけど。」

「より多く跳べるように応援しないと。」

「それはいらなと思うぞ。これは見てるだけで良いんだって。」

この後、三分程俺は説得を続けた。ようやく、俺の説得に応じたのか、彼女は渋々とだが頷いて俺の隣に座り込む。

正直意外である。彼女がここまでお祭り好きだとは。全く想像していなかった。

俺はボケーと縄を跳んでいる様子を観察する。

あっ、引つかかった。やり直しか。

「暇。」

隣からボソッと聞こえてきた。

「そんなもんなんだって。縄跳びあるいは大縄とでもいうのかねえ。兎も角、これは参加していない人はあまり面白くないものなんだって。ま、その分参加人数也多めだけだな。」

どうだ、見たか。この俺のヤ○チャばりの解説を。

「果てしなく微妙だよ。どうせならピ○コロさんぐらいじゃなきゃ。」

繊細なガラスのハートが今にも碎けそうだ。

「そんなわけないでしょ。ガラスはガラスだとしても防弾ガラスの間違えだよ。」

「随分言うなあ。もうHPがゼロかもしれないだろ。」

「それはないと思う。デイス○イアでカンストしたぐらいのHPは

あるはずだから。」

「いちいち嫌味だなあ。」

ここで、時間が来たらしい。最高回数をそれぞれ報告しに行つてあとは結果待ちだな。

5分ほど待つと、結果が出たようだ。

三位だった。

2つの競技が終わって、教室でだらだらしていると、思わぬ知らせがやってきた。

卓球が既に終わったらしい。

「・・・マジ、で・・・？」

「ああ。いつの間にか始まって、いつの間にか終わっていた。あの存在感のなさは半端じゃない。」

報告に來た大貴の証言によるとそうらしい。

「で、結果は？」

「全員初戦敗退だ。」

「・・・ヤバくね？」

「その通りだ。」

1日目はそんな感じで終了した。

卓球に出た2人、ご愁傷様です。

17 一歓迎祭〜激闘編?〜 (後書き)

次回は2日目。クイズ大会です。クイズを考えるために様々な資料とか見なきゃいけないので大変です。

18 一 歡迎祭〜激闘編?〜 (前書き)

18 一歓迎祭〜激闘編?〜

歓迎祭2日目である。

いよいよ今日は俺の唯一参加するクイズ大会がある日だ。

このクイズ大会だが、参加するのにチームを作らなくてはならない。4人で一つのチームだ。それで、チームのメンバーだが、俺と祐司と彼女とあと一人がいる。

決して、あと一人を蔑ろないがしにしているわけでも、名前を覚えていないわけでもない。ただ、俺達の交友関係からは外れている人物であるだけだ。

古瀬村こせむら ゆいか 唯香という名前である。古瀬村がどんな為人ひととなりをしているのかはいまいちよく知らないが、知っていることが少しだけある。

まず、成績が非常に優秀であること。なんでも、この前のテストでは順位が一桁だったとか。後、知っていることは物静かであること。教室なんかでもいつも本を読んでいる姿を見る。典型的な成績優秀者タイプだ。しかし、メガネはかけていない。かなりどうでもいいけどな。

だが、俺には古瀬村をチームに入れた祐司の考えが読めない。確かに成績は良いだろうが、クイズには成績はあまり関係がない。要は物事をより多く知っているか否か、ただだからだ。わざわざ、あまり親しくない人を入れることでチーム内の結束というか、何かに影響を及ぼす可能性も出てくる。

何故だ?

「それには特に理由はない。」

「何を言っているんだ?」

遂におかしくなったか?理由がないのに、あまり仲のよろしくない人を入れるのか?そこまで考えられなくなってきたのか。

「違う。この人選だけは俺がほとんど関与していない。古瀬村が自分から入りたいと言ってきたんだ。俺としては断る理由がなかった

からメンバーに加えたただけだ。」

そう言われちゃしょうがない。

それにしても、おとなしそうに見えるんだが、実はクイズが好きなのかな？

俺がクラスメイトの新たな一面を知ったことに何とも言えない気持ちになった。別に嬉しくもないし、何かの役に立つとも思えない。かといって、デメリットがあるわけでもないの。

そんなことを考えている内に一回戦の時間になったようだ。

「はい。じゃあ、これからクイズ大会一回戦を始めましょう。」

このクイズ大会だが、学年ごとに行われるものだ。学年には10クラスしかない。そこで、一回戦目では、10クラス中5クラスだけが勝ちあがって二回戦に進む。そして、二回戦目では5クラス中3クラスのみが三回戦目、つまり決勝戦に進める。

勝負方法は、一回戦目と二回戦目は同じで、5問先取したクラスから勝ち上がる。三回戦目だけは、早押しクイズになるが。

クイズの内容だが、一戦ごとに何らかのテーマがあり、そこに準拠した問題が出される。それをチーム内で相談したりして、解答する。それが、このクイズ大会の流れだ。

「今回の勝負でのテーマは・・・社会。社会です。それでは、始めていきましょう。」

司会の言葉で、盛り上がる会場。

それにしても、社会か・・・。このクイズ大会はテーマを決めるといっても、結構抽象的らしいからな。僅かにでも掠っていたら出題されるらしいし、気をつけなくては。

「第一問。これは簡単ですね。『国際法の父と呼ばれたのは誰か？』最初だから簡単なのでしょう。一分間解答時間を差し上げます。」

最初だから簡単だな。祐司とかはわかったかな。

「どうだ？ わかりそうか？」

「いや、知らん。」

「これはちよつと・・・。」

思いのほか、チームメイトは役に立たないようだ。仲間の助力を得られないのは少々痛い、やれないことはないし、多分大丈夫だろう。

と、俺は思っていたのだが、最後の一人がかなりの戦力だった。

「これ、グロティウスですよね？」

「お、知ってたか。誰も知らなかったらどうしようか、と思ってた。」

流石は優等生か。思ってた以上に戦力になりそうなのは嬉しい誤算だな。

「これぐらいは基本知識ですから。」

古瀬村は薄く微笑む。

良かった。チームで参加するのに、俺一人だけだったらどうしようかな、と本気で思ってしまった。それが覆っただけでもありがたい。

「はい。解答時間は終了です。皆さん、答えは出ましたか？それでは、答えの発表です。正解は『グロティウス』です。」

それと共に、各々の解答が係の人間に集計されていく。周りを見ると、正解と不正解が半々だ。一年にはちよつとばかり難しかったかもな。

「続きましては二問目。『京都議定書を日本が批准したのは何年でしようか？』これはちよつと難しいですね。」

確かに。京都議定書自体の発行がいつかわかる奴はそこそこいるだろうが、批准が何年かはわからない奴は多いだろう。

「一応聞ぐが、これわかるか？」

「勿論知らん。」

「・・・右に同じ。」

「やっぱりか。」

わかっていただけに、落胆はしない。これを知っている奴はかな

りの猛者だ。おそらく決勝に駒を進められるレベルと見て、間違いないだろう。

「すみません。これはわかりません。」

古瀬村もお手上げのようだ。

まあ、俺は知っているがな。俺はコソコソと誰にも見えないように、配られているボードに答えを書き込む。

「解答時間は終了です。答えは『2002年』です。」

悔しそうに項垂れているのがたくさんいる。だが、2チームだけ正答している。俺を含めて3チームがこの問題を正解したようだ。おそらく、こいつらが決勝で戦う相手だろう。

その後も俺は正解を続け、無事に一回戦は突破できた。

「次は二回戦か……。ハル頼んだぜ。」

祐司は清々しいほど爽やかに、俺に押し付けてきた。

「お前がやりたいって言ってきたのに、何の役にも立たないのは一体どういうつもりだ？全部俺か古瀬村任せじゃねえか！」

「まあまあ。落ち着いて。」

彼女が宥めてくるが、そんなんじゃ俺の怒りは収まらない。いつか目にももの見せてやる。精々その脆弱な人の体であることを悔やむがいい。くっくくく。

「ああ、ハルが怒りのあまり大魔王みたいなことを言い出した。こりやもう駄目かもしれない。」

「悪の親玉みたいになっちゃった……。」「

彼女は遠い目をして言う。

「ふふふ。」

そんな時だった。笑い声が聞こえてきたのは。

その主は誰かと言うと、古瀬村だった。

俺ら3人は驚きのあまり思考が停止する。

古瀬村は可笑しくてしょうがないといった体で、必死に笑いを囁

み殺そうとしてるがまるでできていない。腹と口に手を当て、身を攀じるほどに笑っている。とは言っても、笑い過ぎて、笑い声がほとんど出ていなかったが。

とても珍しい光景だった。古瀬村と言えば、前述の通り寡黙で、大人しめの娘であるイメージが強かった。少なくとも、こんな風に笑い転げている姿など誰が想像できようか。

「いやはや、こいつは魂消^{たまげ}たな。古瀬村のこんなレアな姿を見れるとは。」

未だ呆然としながらも、思わず口に出してしまった風な祐司。

「古瀬村さんってこんな人だったんだ……。」

彼女もそう零す。

祐司の呟きに思考が徐々に現実に戻ってくるのを感じながら、俺も思わず呟く。

「そんな顔も出来るんじゃないか。」

俺達が呆然と見つめていることに気付いたのだろうか、必死に笑いを堪えようとする古瀬村。

涙を拭いながら、

「失礼ですね。私だって人間です。そんな可笑しい会話を聞かされたら笑わずにはいられません。」

と古瀬村は言っているが、それでも顔は笑ったままである。

そんな感じで、意外な切り口から古瀬村と仲良くなった俺達であった。

で、遂にやってきた決勝戦である。

因みに二回戦目はストレートに勝ち上がった。

18 一歓迎祭〜激闘編?〜 (後書き)

2回戦目飛ばしてすみません。何かクイズが思ったように出来なかったので、こんなショボイ感じになりました。

次回は決勝戦で、歓迎祭編の最終話になる予定です。次回のクイズはちゃんと全問つくっていきます。次回こそはしっかりとクイズを出していきます。

ですが、あまり期待せず待っていてください。

お知らせ

えゝ。誠に勝手な理由ながら暫く連載を休止させて頂く所存でございます。

どうも最近上手く文章が書けていない気がしましてですね、一旦休んで文章力を磨こうか、と思っっているわけです。次話も書いては消し、書いては消しの無限ループになっています。

無理してしまいちな話を投稿するくらいなら、暫く休んでしつかりしたものを読んでもらいたい、という作者の自分勝手な考えの下、このような所業となりました。

具体的な復活日時は言えませんが、最大で2〜3ヶ月程度と考えています。その頃には今まで温めていたいくつかの作品も同時に出せると思いますので、気を長くして待っていていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5799s/>

俺と彼女の騒乱日記

2011年10月9日00時14分発行